上鑵子遺跡群

福岡県糸島郡前原町大字有田字上鑵子所在遺跡調査報告

前原町文化財調査報告書

第　3　集

1980

前原町教育委員会

序　　文

本町は，わが国の中で最も早く開けた地であり，埋蔵文化財が数多く存在することが確認されています。近年，人口増加が著しく，これに伴う宅地の開発や農業基盤の整備等が非常に多く行われるようになりました。

これらの開発と文化財保護との調整を図りつつ後世の人々に伝えていくことは，われわれの大きな課題だといえます。

この報告は，文化財に対して，深い御理解を持っておられる株式会社九州住宅流通サービスからの委託事業として発掘調査を行ったものです。

遺跡の所在地は，福岡県糸島郡前原町大字有田字上鑪子にあり，竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土壙・柵列等の弥生時代後期から古墳時代期にわたる遺跡が確認されました。

本報告が研究資料の一つとして御活用いただければ幸いに存じます。

なお，調査にあたって御協力くださった地元の方々や，調査の補助に進んで御努力いただいた福岡大学学生の新開・久原氏や樗木氏，さらに，クラブ活動の一環としてお骨折りをおかけした糸島高校郷土部・城南高校郷土研究部の生徒のみなさんに深く謝意を表します。

前原町教育委員会
教育長　豊　島　禮　蔵

例　　言

1．この報告は，福岡県糸島郡前原町大字有田字上鐘子（しょうかんす）所在の上鐘子遺跡第３次調査の調査報告である。

2．発掘調査・整理作業は，株式会社九州住宅流通サービスの協力を得，前原町教育委員会が実施した。

3．本書の遺構実測は，川村博・樗木弘明・新開誉之・久原政基があたり，遺物実測等の整理作業は，川村がおこない，挿図製図には，那珂川町委員会澤田康夫氏の協力を得た。

4．本書の執筆・編集は川村がおこなった。

本　文　目　次

Ⅰ　調査への経過……1
Ⅱ　位置と環境……2
Ⅲ　遺構と遺物……6
（1）調査区設定の経過・方法……6
（2）遺構……6
概要……6
柵列（柱穴列）……6
住居跡……12
掘立柱建物……21
土壙……22
溝……24
不明遺構……26
（3）遺物……27
柵列（柱穴列）出土土器……27
住居跡出土土器……27
土壙出土土器……40
溝内出土土器……44
不明遺構出土土器……46
柱穴内出土土器……50
S　:35；E　:05地区2・3層出土土器……51
農工具……52
漁具……53
紡織具……54
装身具……54
武器……55
Ⅳ　まとめ……56
住居跡の時期と立地について……56
弥生時代住居跡の形態について……56
古墳時代住居跡の形態について……59
溝と住居跡との関係について……59

掘立柱建物について……59
砥石・工作台を有する住居跡について……59
赤焼き土器について……59

図　版　目　次

図版1　〔上〕　上鐘子遺跡群近景（東より）
〔下〕　同　上
図版2　〔上〕　上鐘子遺跡群近景（東より）
〔下〕　同　上
図版3　〔上〕　上鐘子遺跡群近景（東より）
〔下〕　同　上
図版4　〔上〕　ＳＢ19・ＳＢ13付近住居跡群遠景（東より）
〔下〕　同　上　近景（東より）
図版5　〔上〕　ＳＢ44・ＳＢ45付近遺構群遠景（東より）
〔下〕　同　上　近景（東より）
図版6　〔上〕　ＳＢ19住居跡群近景（南より）
〔下〕　ＳＢ01・ＳＢ06（北より）
図版7　〔上〕　ＳＢ05（西より）
〔下〕　ＳＢ07（東より）
図版8　〔上〕　ＳＢ08～ＳＢ10（東より）
〔下〕　ＳＢ16（西より）
図版9　〔上〕　ＳＢ20（東より）
〔下〕　ＳＢ20土器出土状況（東より）
図版10　〔上〕　同　上
〔下〕　同　上
図版11　〔上〕　ＳＢ29・ＳＢ30住居跡群付近（東より）
〔下〕　ＳＢ30（東より）
図版12　〔上〕　ＳＢ23（東より）
〔下〕　ＳＢ28・ＳＢ29（東より）
図版13　〔上〕　ＳＢ25・ＳＢ26付近住居跡群（東より）
〔下〕　ＳＢ47・ＳＫ06付近遺構群（東より）
図版14　〔上〕　ＳＢ33付近遺構群（東より）

〔下〕　ＳＢ31～ＳＢ33（東より）
図版15　〔上〕　ＳＢ51付近遺構群（東より）
〔下〕　ＳＢ51（東より）
図版16　〔上〕　ＳＢ55～ＳＢ60付近遺構群（南より）
〔下〕　同　上　（北より）
図版17　〔上〕　ＳＢ59付近（西より）
〔下〕　ＳＢ59（西より）
図版18　〔上〕　ＳＢ60（西より）
〔下〕　ＳＢ59土器出土状況（東より）
図版19　〔上〕　ＳＢ60土器出土状況（東より）
〔下〕　同　上　（東より）
図版20　〔上〕　ＳＢ80～ＳＢ82（東より）
〔下〕　ＳＢ80（東より）
図版21　〔上〕　ＳＢ88（東より）
〔下〕　ＳＢ94（東より）
図版22　〔上〕　ＳＫ04付近遺構群（東より）
〔下〕　ＳＫ04近景（東より）
図版23　〔上〕　ＳＫ01付近遺構群（東より）
〔下〕　ＳＫ08（東より）
図版24　上鑵子遺跡出土土器①
図版25　同　上　②
図版26　同　上　③
図版27　同　上　④
図版28　同　上　⑤
図版29　上鑵子遺跡出土土器・鉄器・石器
図版30　上鑵子遺跡出土石器・鉄器・玉類
図版31　上鑵子遺跡出土砥石

挿　図　目　次

第１図　上鑵子遺跡群位置図と周辺遺跡（1/50,000）…… 3
第２図　上鑵子遺跡群付近地形図（1/2500）…… 4
第３図　ＳＡ01・ＳＢ94・ＳＢ102実測図（1/80）……6～7

第４図　ＳＡ02・ＳＢ03・ＳＢ100実測図（1/80）…… 7
第５図　ＳＡ02・ＳＢ100柱穴位置模式図（1/200）…… 7
第６図　ＳＢ01・ＳＢ06実測図（1/80）…… 7
第７図　ＳＢ04実測図（1/80）……12
第８図　ＳＢ05実測図（1/80）……13
第９図　ＳＢ45～ＳＢ50・ＳＫ07実測図（1/80）……16
第10図　ＳＢ73・ＳＢ101実測図（1/80）……18
第11図　ＳＢ84～ＳＢ86実測図（1/80）……19
第12図　ＳＢ88実測図（1/80）……20
第13図　ＳＢ95実測図（1/80）……21
第14図　ＳＢ101柱穴位置模式図（1/200）……21
第15図　ＳＫ04実測図（1/80）……22
第16図　住居跡出土土器実測図①（1/4）……30
第17図　　同　上　②（1/4）……31
第18図　　同　上　③（1/2）……31
第19図　　同　上　④（1/3）……32
第20図　　同　上　⑤（1/3）……37
第21図　ＳＫ08出土土器実測図（1/2）……41
第22図　土壙出土土器実測図①（1/4）……41
第23図　土壙出土土器実測図②（1/3）……42
第24図　溝内出土土器実測図（1/4）……45
第25図　不明遺構出土土器実測図①（1/4）……46
第26図　不明遺構出土土器実測図②（1/3）……48
第27図　ＳＸ14出土土器実測図（1/6）……48
第28図　柱穴出土土器実測図①（1/4）……49
第29図　　同　上　②（1/2）……49
第30図　　同　上　③（1/3）……49
第31図　Ｓ：35；Ｅ：02地区２層出土土器実測図①（1/4）……50
第32図　　同　上　②（1/2）……50
第33図　Ｓ：35；Ｅ：02地区３層出土土器実測図（1/3）……51
第34図　Ｓ：30；Ｅ：05；Ｅ：05地区２層出土土器実測図①（1/3）……51
第35図　鉄鋤先・鉄鍬先実測図（1/2）……52
第36図　石包丁・石鎌実測図（1/2）……52

第37図　石錘実測図（1/2）……53
第38図　紡錘車実測図（1/2）……54
第39図　玉類実測図（2/3）……54
第40図　石戈・鉄剣実測図（1/2）……54
第41図　住居跡時期別配置図①（1/900）……57
第42図　　同　上　　②（1/900）……58

表　目　次

第１表　上鑪子遺跡群第３次調査過程表……2
第２表　ＳＡ02・ＳＢ100柱穴計測表……7
第３表　住居跡一覧表①……8
第４表　　同　上　②……9
第５表　　同　上　③……10
第６表　　同　上　④……11
第７表　　同　上　⑤……12
第８表　ＳＢ101柱穴計測表……21
第９表　土壙一覧表……23
第10表　住居跡出土遺物一覧表①……28
第11表　　同　上　　②……29

付　図　目　次

付図１　上鑪子遺跡群（第３次）地形図（1/600）
付図２　上鑪子遺跡群（第３次）遺構配置図（1/200）

I　調査への経過

上鑵子遺跡群は，福岡県糸島郡前原町大字有田字上鑵子 757－6 他に所在する。

本遺跡群は，国道 202号線今宿バイパス建設予定路線内の遺跡として，昭和46（1971）年6・7月に第1次調査が，昭和47（1972）年12月より昭和48（1973）年2月までに第2次調査としておこなわれ，住居跡3軒・掘立柱建物2軒・溝状遺構2条・方形溝1条・土壙墓2基が調査されていた。(註1)

昭和54（1979）年6月に，株式会社九州住宅流通サービスより前原町役場都市計画課へ宅地分譲を開発目的とする開発計画事前審査願が提出された。よって，前原町教育委員会は，この地が埋蔵文化財包蔵地であることを開発計画事前審査会の際，事業主体者である株式会社九州住宅流通サービスに連絡し，数度の協議をもち，2回の予備試掘調査をおこなった。その結果，同社からの委託事業として，前原町教育委員会が発掘調査を昭和54年11月15日より昭和55年2月20日までおこない，その後，遺物整理等の作業をした。その過程は第1表のとおりである。

なお，発掘調査の組織・関係者は次のとおりである。

調査主体　前原町教育委員会

教育長　豊島　禮蔵

社会教育課課長　野坂　猷英

同　主査　西　孝明

主事　岡本登美子

主事　川村　博〔調査担当〕

発掘調査の実施にあたっては，有田・高来寺・三雲行政区の方々には調査作業員として協力をいただき，樗木弘明・新開誉之（福岡大学2年）・久原政基（同大学1年）氏に調査・遺構実測等に協力をいただいた。また，調査時等に，福岡県教育委員会文化課課長藤井巧氏・調査第2係長栗原和彦氏・主任技師柳田康雄・橋口達也・中間研志各氏には指導を得，原田大六氏・県文化財保護指導員松吉俊実氏，糸島高校教諭内田担氏には助言をいただき，糸島高校郷土部（部長 田中敦子）・城南高校郷土研究部からも参加の申込みがあり，調査に従事していただいた。

最後に，全面的に文化財保護行政の趣旨等をご理解いただいた株式会社九州住宅流通サービスに深く感謝いたします。

註1　栗原和志・上野精志他編「上鑵子遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告・第5集』福岡県教育委員会　1977

II　位置と環境

上鑵子遺跡群は，背振山山系を水源とする雷山川・多久川の間にある標高15.3～32.3mの丘陵上に立地する。

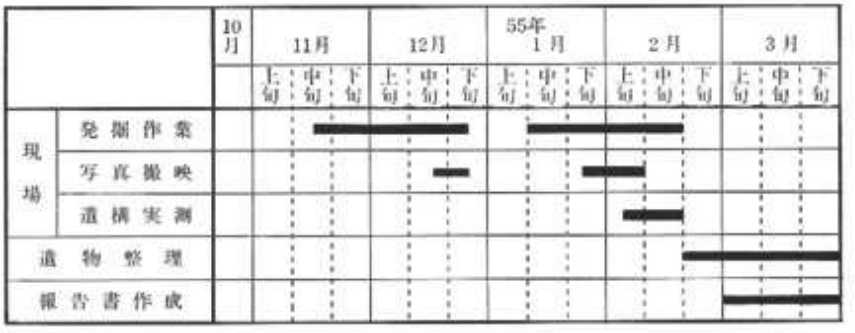
本遺跡群の周辺遺跡は，縄文時代後期より歴史時代にいたる種々の遺跡が存在するが，このことについては，坂元古墳群発掘調査報告書等(註1)に記述しているので，それ以外の主要な遺跡にとどめることにする。

福岡市西区大字千里字シビナ所在の千里シビナ遺跡は，福岡市教育委員会文化課によって調査され，縄文時代後期の住居跡を検出し，三万田式土器などを出土している(註2)。

糸島郡前原町大字高田周辺の一丁田遺跡では縄文時代後期と推定される石斧を出土しており(註3)，千里シビナ遺跡と共に縄文時代期の遺跡の拡がりを確認しなければならない状況である。

また，大字井田には，井田用会支石墓(註4)が発見されており，磨製石鏃等を出土しており，志登支石墓群(註5)・三雲遺跡群(註6)の郡でも，同様な磨製石鏃を出土している。

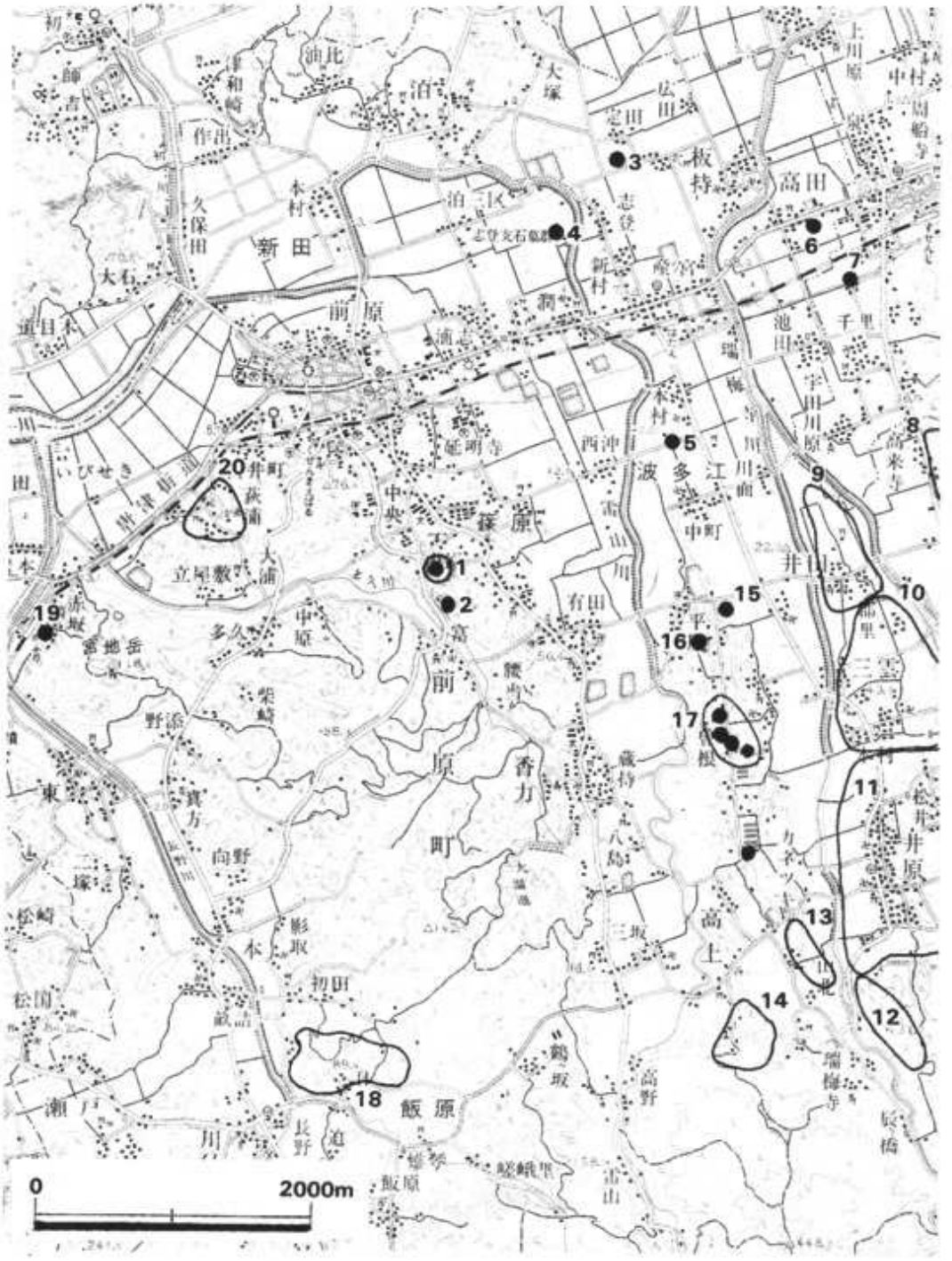
井原地区にあっては，奈良時代末よりの遺構が存在し，さらに，弥生～歴史時代の生活・墳墓遺構があると考えられる(註7)。



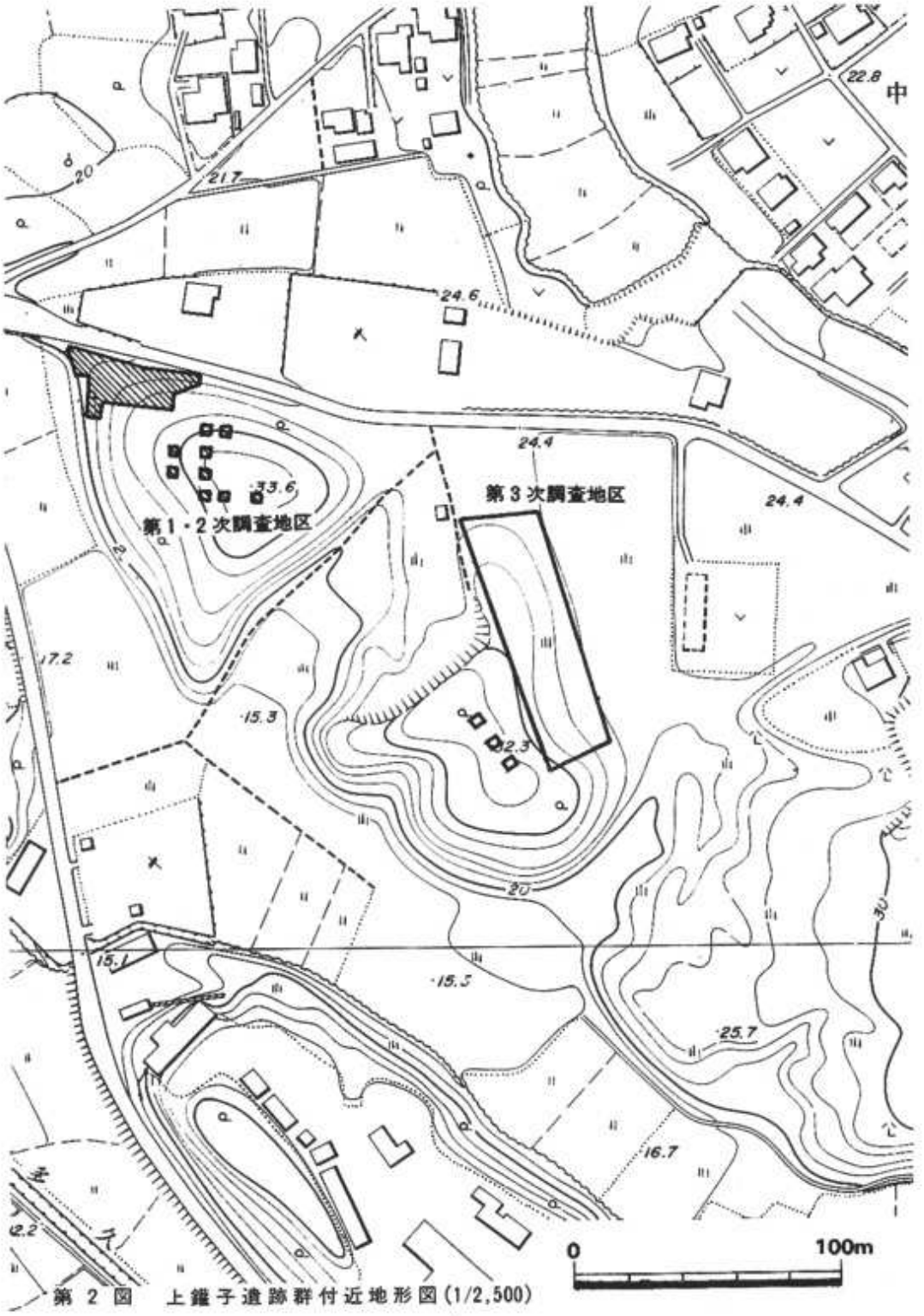
第1表　上鑵子遺跡群第3次調査過程表

周　辺　遺　跡（3ページ参照）

1．上鑵子遺跡	2．坂元古墳群	3．志登神社	4．志登支石墓群
5．波多江氏館跡遺跡	6．一丁田遺跡	7．千里シビナ遺跡	8．怡土城跡
9．井田地区遺跡	10．三雲遺跡群	11．井原地区遺跡	12．正恵古墳群
13．山北古墳群	14．高上古墳群	15．石ヶ崎支石墓群	16．平原遺跡群
17．曽根古墳群	18．日明古墳群	19．釜塚古墳	20．荻ノ浦遺跡



第 1 図　上鍋子遺跡群位置図と周辺遺跡（1/50,000）



第 2 図　上鑵子遺跡群付近地形図(1/2,500)

泊・大塚地区では，詳細な規模等は不明であるが，前方後円墳が数基立地しており，割合に古式の様相をもつものと考えられ，鑑鏡を出土した古墳も存在する。(註8)

長野・日明地区では，盟主的な立地と考えられる前方後円墳や，10数基の円墳が存在する。(註9)

二塚地区では，東京国立博物館に所蔵されているガラス製二塚古墳や数基の低墳丘墓の方形墳を確認されている。

加布里地区では，古式の横穴式石室を主体部とする釜塚古墳が存在し，昭和47年に調査がおこなわれている。

上述の以外の周辺遺跡には，糸島郡二丈町一貴山所在の銚子塚古墳があり，福岡市西区金武では，装飾古墳が調査されている。

註1　川村　博編『坂元古墳群』　前原町教育委員会　1980

同　　編『正恵古墳群』　前原町教育委員会　1980

2　塩谷勝利・田中寿夫編『千里シビナ遺跡』　福岡市教育委員会　1980

3　原田大六監修『前原町文化財地名表』　前原町教育委員会

4　註3に同じ

5　斎藤　忠編『志登支石墓群』　文化財保護委員会

6　柳田康雄編『三雲遺跡Ⅰ』　福岡県教育委員会　1980

7　昭和54年度正恵古墳群発掘調査の際，周辺遺跡の踏査の結果より

8　註3に同じ

9　　同　上

Ⅲ　遺構と遺物

（1）　調査区設定の経過・方法

上鐘子遺跡群の第３次調査では，第１・２次調査の結果を考慮し，また，現地踏査等の結果にもとづいて，丘陵の東側に，試掘溝を設定して，その地区に調査区を設定した。さらに，丘陵上には，調査時，遺構実測等と並行して，３ヵ所に４×４ｍのグリッド調査をおこなった。その結果，丘陵上には，若干の弥生土器片を出土したが，細片で磨滅しており，第１次・第２次調査の結果と同様に，顕著な遺構は検出しえなかった。土壌等の流失と考えられる土層でもなく，表層下には黄褐色粘質土の地山であった。

また，町道上鐘子・向坂線に隣接し，第１・２次調査と第３次調査の間に防火用水槽が，調査中に建設されることになり，施工業者の協力を得て，その建設予定地を重機で丁寧に計画の深さまで掘下げていただいたが，地山である黄褐色粘質土中には，先土器時代の遺構・遺物は検出しえなかった。

前述した経過を踏まえ，調査区を設定し，調査区を縦走し，磁北を基準とする南北軸を定め，その軸上の北側（調査区の北側）に，基準杭（Ｏ：00；Ｏ：00）を置き，５ｍ四方の小調査区を設定し，地区杭を打ち，東西南北方向にＥＷＮＳを付し，距離を示すようにした。例えば，基準杭（Ｏ：00；Ｏ：00）より南へ20ｍ・東へ10ｍの場合，Ｓ：20；Ｅ：10として，調査・整理に対応できるように設定し，調査を開始した。

（2）　遺　　構

概　要

上鐘子遺跡群の第３次調査では，標高約21～30ｍの間に，柵列２条・住居跡99軒・掘立柱建物４棟・溝13条・土壙22基・不明遺構22ヶ所を検出した。

遺跡は，丘陵の東側斜面に立地するため，土壌等の流失が著しく，特にＳ：20；Ｏ：00付近よりＳ：30；Ｗ：05の間は極立っていて，層位の逆転が認められた。

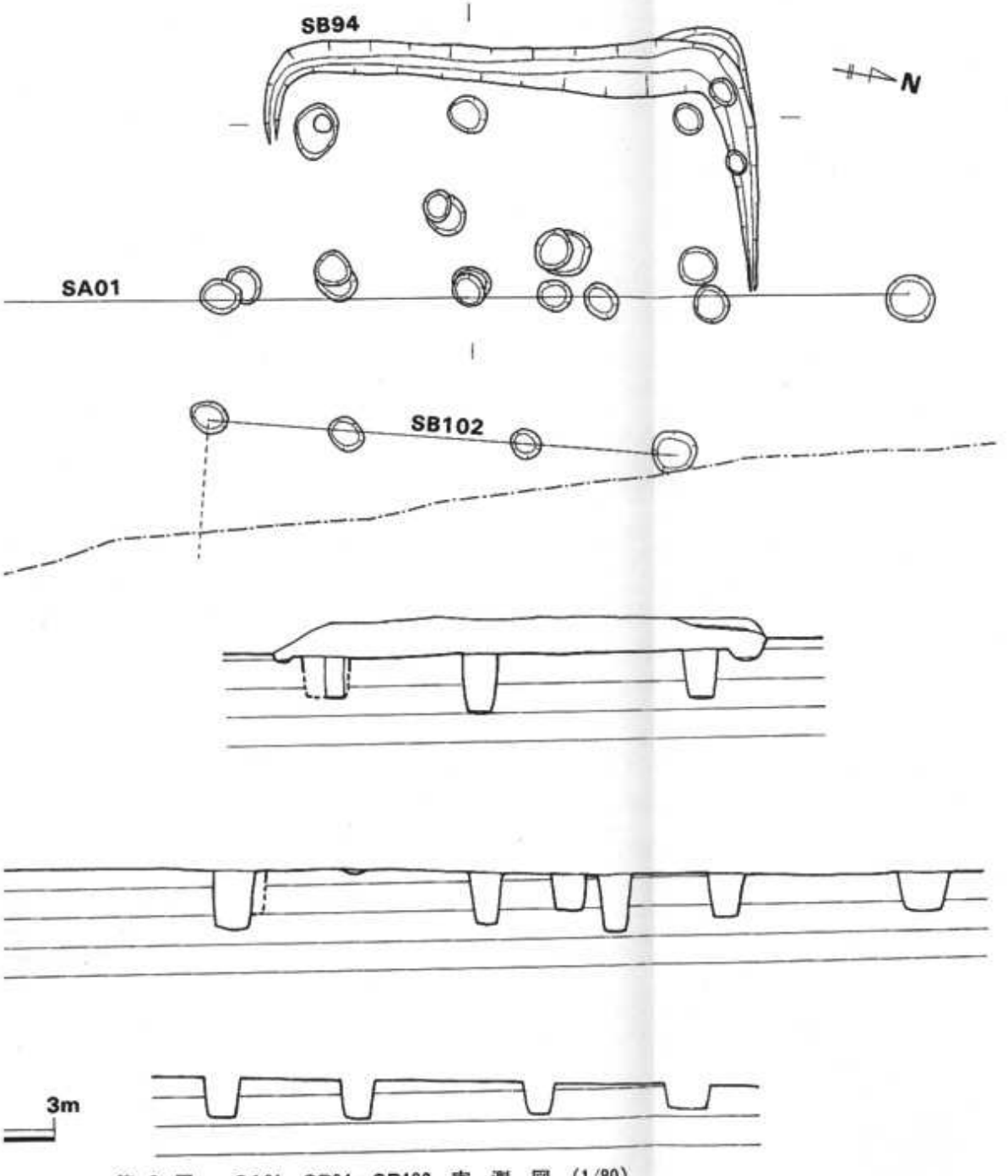
よって，一般的に，住居跡・溝・土壙等の東側は崩壊しているため，遺構の全容を知りえるものは数少ない。

なお，住居跡・土壙は第３～７表・第８表に形態・規模等をあらわしている。

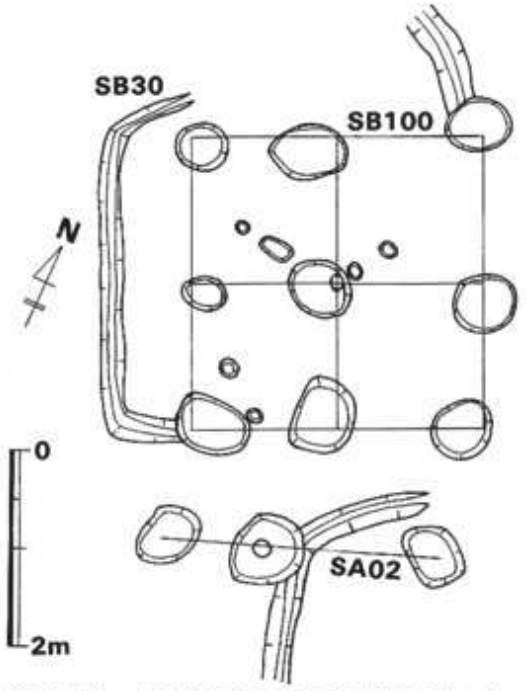
柵　列（柱穴列）

ＳＡ01（第３図）

発掘区南側に位置し，柱間約 2.875ｍを測る４間の柱列である。柱穴の中で南側で径14ｍの柱痕を検出できた。



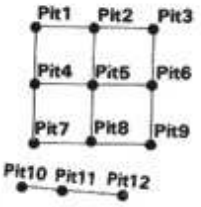
第 3 図　SA01・SB94・SB102 実 測 図 (1/80)



第 4 図　SA02・SB30・SB100実測図(1/80)

柱穴番号	大きさ 東西×南北	深さ	柱痕の径
Pit 1	54 × 50	72	—
Pit 2	83 × 58	70	—
Pit 3	69 × 56	65	—
Pit 4	49 × 36	69	—
Pit 5	64 × 60	65	—
Pit 6	65 × 61	61	14
Pit 7	76 × 59	67	—
Pit 8	66 × 80	63	—
Pit 9	64 × 62	58	—
Pit 10	60 × 60	61	—
Pit 11	66 × 73	58	18
Pit 12	61 × 64	58	—

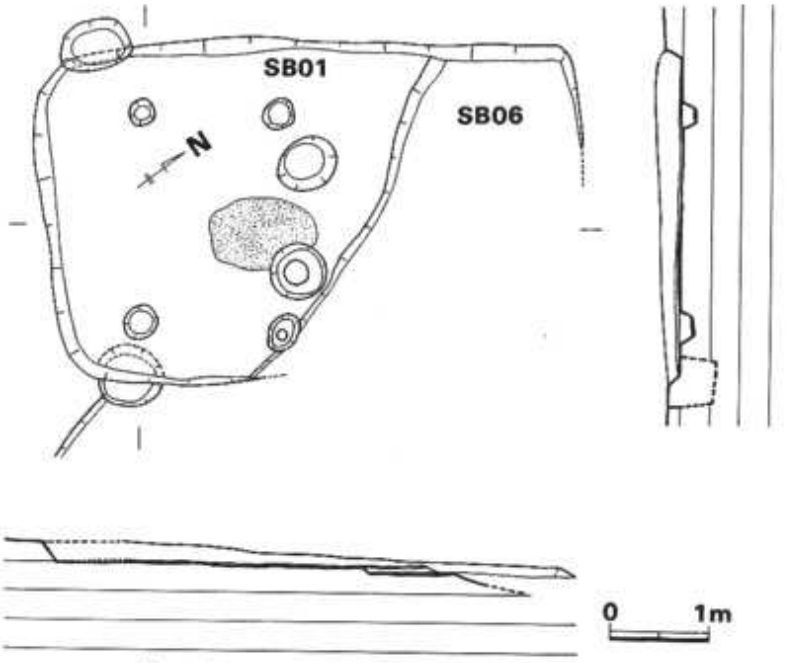
第 2 表　ＳＡ02・ＳＢ100柱穴計測表（単位：cm）



第 5 図
SA02・SB100
柱穴位置模式図(1/200)

ＳＡ02（第４・５図・第８表）

Ｓ：15；Ｅ：15付近で検出した２間の柱列で１個の柱穴で柱痕を検出できた。



第 6 図　SB01・SB06 実 測 図 (1/80)

	規　模（m）	形態	主柱穴の数・大きさ(cm)	炉・カマド 炉	炉・カマド カマド	ベッドの有無	貯蔵穴	時　期	備　考
SB01	3.39×(3.9+α)	方形	4 +α・41	有	—	—	—	弥・後・中	SB06より新しい
SB02	(1.5+α)×(1.18+α)	方形	—	—	—	—	—	?	
SB03	(1.26+α)×(0.25+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB01より古い 須恵器混入
SB04	2.78×(1.26+α)	方形	—	—	—	西側	—	弥・後・後半	SB03より新しい
SB05	4.45×(4.3+α)	方形	4 +α・約75	有	—	—	—	弥・後・初	周溝がめぐる
SB06	(3.56+α)×(1.9+α)	方形	3 +α・33	—	—	—	—	?	SB01より古い
SB07	(2.7+α)×(1.83+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・前半	
SB08	3.3+(0.9+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB09・SB10より新しい
SB09	—	方形?	—	—	?	—	—	古・後	SB08より古く，SB10より新しい
SB10	—	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB08・SB09より古い
SB11a	3.5×(2.28+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB11bより古い
SB11b	(2.75+α)×(0.4+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB11aより新しい。弥生混入
SB12	2.96×(1.42+α)	方形	—	—	—	—	—	古・後	SB11bより古い
SB13	3.22×(1.35+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB12より新しい
SB14	(2.7+α)×(1.54+α)	方形	—	有	—	—	—	弥・後・初	SB15・SK01より古い
SB15	(3.74+α)×(1.2+α)	方形	—	—	?	—	—	弥・後・前	SB14より新しい
SB16	(4.26+α)×(24×α)	不整形	2・約30	—	?	—	—	古・後	
SB17	(2.78+α)×(3.1+α)	不整形	—	—	?	西側?	—	古・後	SB18より古い
SB18	(2.5+α)×(2.15+α)	方形	—	—	?	西側?	—	古・後	SB17より新しい
SB19	5.1×4.08	方形	—	—	?	西側?	—	古・後	SB18より古い 周溝?を有す
SB20	3.5×(1.1+α)	方形	1 +α・41	—	?	—	—	弥・後・初	SK02より古い
SB21	—	不整形	—	—	—	—	—		SB22より古い SK03より新しい
SB22	—	不整形	—	—	—	—	—		SB21・SB03より新しい

第3表　住居跡一覧表①

	規　模（m）	形態	主柱穴の数・大きさ(cm)	炉・カマド 炉	炉・カマド カマド	ベッドの有無	貯蔵穴	時　期	備　　考
SB23	(3.96+α)×(0.35+α)	方形	2＋α・約50	—	—	—	—	弥・後・初	SK03・SK04より新しい
SB24	(3.0+α)×(2.0+α)	方形	—	—	—	—	有？	弥・後 中頃？	SK04・SK05より古い
SB25	(4.0+α)×(1.9+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB24より古い
SB26	(3.45+α)×(1.2+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB24・SB25より新しい
SB27	(1.1+α)×(1.3+α)	方形	1・55	—	—	—	—	弥・後・前半	SB25より新しく，SB06より古い
SB28	(2.75+α)×(0.9×α)	方形	2・30	—	—	—	—	?	—
SB29	2.45×(1.95+α)	方形	—	—	—	南側	—	弥・後・初？	—
SB30	3.9×(1.2+α)	方形	—	—	—	—	—	?	—
SB31	3.64×(0.95+α)	方形	—	—	—	西北側	—	弥・後・前半	SB32より古い
SB32	(3.42+α)×(0.54+α)	方形	—	—	—	—	—		周溝をもつ
SB33	4.64+(2.75+α)	方形	2＋α・約45	—	—	—	—	弥・後・前半	周溝をもつ
SB34	(3.2+α)×(1.35+α)	方形	1＋α・約40	—	—	—	—	?	—
SB35	3.54+(1.2+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB31より古い
SB36	(3.1+α)×(1.12+α)	方形	1＋α・約50	—	—	—	—	弥・後・前半？	SB35より新しい
SB37	(1.38+α)×(0.75+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB31より古い
SB38	(1.58+α)×(0.95+α)	方形	1＋α・約35	—	—	—	—	弥・後・初	SB37より新しい
SB39	(3.19+α)×(2.85+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・前半	SB38より新しい SK08より古い
SB40	(2.36+α)×(0.65+α)	方形	—	—	?	西北側		弥・後？	須恵器混入
SB41	(3.98+α)×(1.36+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SX02より新しい
SB42	(2.7+α)×(0.5+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB41より古い
SB43	4.35×(1.8+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	—

第4表　住居跡一覧表②

	規模（m）	形態	主柱穴の数・大きさ(cm)	炉・カマド 炉	炉・カマド カマド	ベッドの有無	貯蔵穴	時期	備考
SB44	(2.45+α)×(0.76+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	周溝をもち，SB45より古い
SB45	3.9×(2.05+α)	方形	2(+2)・約25	—	—	—	—	弥・後・後半	SB44より新しい。周溝をもつ
SB46	3.5×(1.72+α)	方形	2(+2)・約45	—	—	—	—	弥・後・前半	SB45より古い
SB47	2.95×(1.45+α)	方形	2(+2)・約43	—	—	—	—	弥・後？	SB46より古い
SB48	3.14×(1.7+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後？	SB49より新しい
SB49	(2.25+α)×(0.85+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後	SB48より古い
SB50	(1.3+α)×(1.1+α)	方形	1+α・約44	—	—	—	—	？	
SB51	3.84×(3.2+α)	方形	—	—	—	—	西側不整形	弥・後	SB52より新しい
SB52	(2.32+α)×(2.35+α)	方形	—	—	—	—	—	？	SD10が新しい
SB53	(2.9+α)×(0.5+α)	方形	2+α・約28	—	—	—	—	—	
SB54	(2.4+α)×(1.8+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後	SD10より新しい。周溝をもつ
SB55	4.05×(1.3+α)	方形	1+α・約30	有	—	—	— —	弥・後・後半	須恵器混入
SB56	(2.05+α)+(0.4+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB55より古い
SB57	—	—	—	—	—	—		—	SB55が古い
SB58	6.0×(1.1+α)	方形？	2+α・約35	—	？	—	—	古・後	SB55・SB56より新しい
SB59	3.75×(1.8+α)	方形	3+α・約23	—	？	—	—	古・後	SB55より新しい
SB59b	同？	方形	？	有	—	—	—	弥・後・初	炉（焼土上に弥生土器を検出し，周溝をもつ）
SB60	4.5×(1.35+α)	方形	2+α・約35	有	—	—	—	弥・後・初	SB59bより新しい
SB61	6.5×？	不整形	—	—	—	—	—	古・後	
SB62	3.4×(1.7+α)	方形	—	—	？	—	—	古・後	SB64より古い
SB63	4.2×(1.25+α)	方形	—	—	—	—	—	古・後	SB64より古い
SB64	6.0×(0.3+α)	方形	—	—	—	—	—	古・後	SB65・SB66・SB67より新しい

第5表　住居跡一覧表③

	規　模　(m)	形態	主柱穴の数・大きさ(cm)	炉・カマド		ベッドの有無	貯蔵穴	時　期	備　　考
				炉	カマド				
SB65	3.7×(1.1+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB63・SB64より古い。周溝あり
SB66	(2.2+α)×(1.1+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB65より古い
SB67	(3.0+α)×(1.0+α)	方形?	—	—	—	—	—	?	SB65より古い
SB68	3.15×(1.5+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB69・SB70より新しい
SB69	4.05×(2.35+α)	方形	2+α・約33	—	—	—	—	?	SB70より古い
SB70	2.3×(1.5+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB69より新しい
SB71	4.3×(2.4+α)	方形	1+α・約30	—	?	南西側	—	古・後	SX13より古い
SB73	5.25×(0.4+α)	方形	—	—	—	—	—	?	SB101 より古い
SB74	(1.7+α)×(0.5+α)	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物はない
SB75	4.6×(0.8+α)	方形	—	—	—	—	—	弥・後・?	SB76より新しい
SB76	(3.2+α)×(1.2+α)	方形	—	—	—	南西側	—	弥・後・?	SB75より古い
SB77	(4.3+α)×(1.55+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB75より新しい
SB78	(3.5+α)×(1.85+α)	不整形?	—	—	—	—	—	?	SB77より古い
SB79	4.3×(0.9+α)	方形	1+α・約40	—	?	—	—	古・後	
SB80	(0.6+α)×(1.4+α)	方形?	—	—	?	—	—	弥・後・?	SB81より古い
SB81	3.1×(2.5+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB80・SB82より新しい
SB82	(1.5+α)×(2.7+α)	方形?	—	—	—	—	—	?	SB81より古い
SB83	(2.0+α)×(2.8+α)	方形	—	—	—	西北側	—	?	SK15より古い
SB84	(2.35+α)×(0.9+α)	方形	—	—	—	—	—	—	周溝を有す
SB85	3.45×(2.25+α)	不整形	—	—	—	—	—	弥・後	SB86より古い
SB86	3.25×(1.65+α)	方形	3+α・約22	—	—	—	—	?	SB85より新しい
SB88	3.18×(2.8+α)	方形	2+α・約25	有	—	—	—	弥・後	周溝を有する

第6表　住居跡一覧表④

	規　模　(m)	形態	主柱穴の数・大きさ(cm)	炉・カマド 炉	炉・カマド カマド	ベッドの有無	貯蔵穴	時　期	備　　考
SB89	3.5×(1.35+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後?	SB90より古い
SB90	4.6×(1.15+α)	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB89より新しい
SB91	(0.75+α)×(0.3+α)	方形	—	—		—	—	古・後?	出土遺物なし
SB92	(1.35+α)×(0.4+α)	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし SB91より古い
SB93	2.8×(0.55+α)	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし
SB94	6.0×(3.1+α)	方形	3+α・約40	—	?	—	—	古・後	周溝をもつ
SB95	4.65×(1.23+α)	方形	3+α・約45	—	?	—	—	古・後?	
SB96	3.05×(0.45+α)	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし
SB97	3.85×(0.55+α)	方形	—	—	—	—	—	?	同
SB98	(2.0+α)×(0.2+α)	方形	—	—	—	—	—	?	同
SB99	(3.9+α)×(0.38+α)	方形	—	—	—	—	—	?	同

第7表　住居跡一覧表⑤

住居跡

SB01（第6図）

O：00；E：05付近に位置する方形住居跡であり，SB06を切っている。床面に焼土を有し，炉と考えられる。6個の柱穴を検出し，4個が主柱穴になると考えられる。

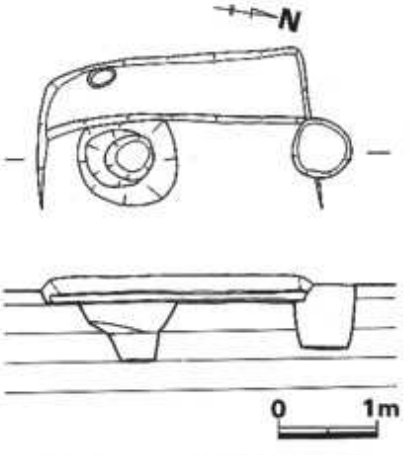
また，SB03・SD04を切っている。

SB03

SB01・SB04に切られている方形住居跡である。

SB04（第7図）

S：05；E：10付近に位置し，SB03を切ったベッド状遺構をもつ方形住居跡である。柱穴等は検出しえなかった。



第7図　SB04実測図(1/80)

ＳＢ05（第８図）

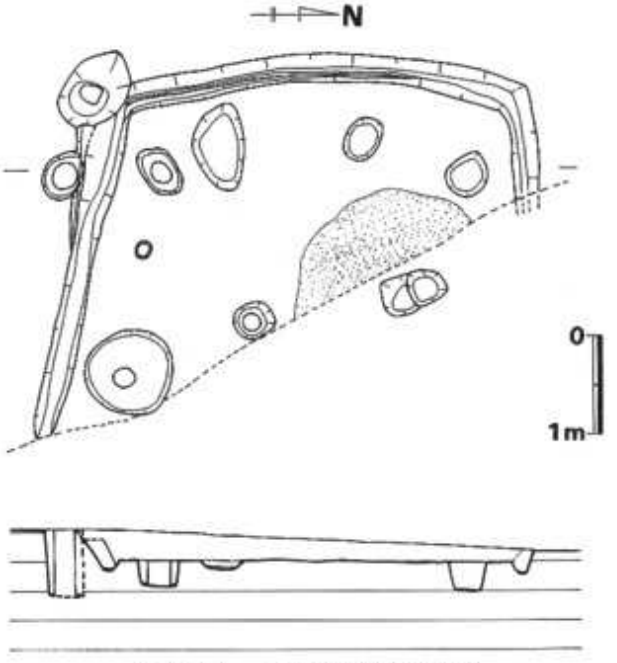
ＳＢ04の東側で検出した方形住居跡で，周溝をもつ。周溝は巾20～25㎝，深さ約10㎝を測り，全周すると考える。柱穴は９個検出したが，２個が主柱穴であり，焼土を有する。また，住居跡南西隅では，柱穴によって切られている。

ＳＢ06（第６図）

ＳＢ01に切られて，東側は削平されている住居跡で，方形を呈すると考えられる。

ＳＢ10

Ｏ：00；Ｗ：05付近に位置する方形住居跡で，東側は削平されており，ＳＢ08・ＳＢ09に切られている。



第 8 図　SB05実測図（1/80）

ＳＢ11ａ

ＳＢ11ｂと共に検出した住居跡で，検出時に切合い関係を確認できなく，埋土掘下げ時に２軒であることがわかり，ＳＢ11ｂより古く，弥生後期初頭に比定できよう。

ＳＢ11ｂ

ＳＢ11ａと共に検出した方形住居跡であり，床面に須恵器・杯身を出土した。

ＳＢ12

ＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂを切っている方形住居跡であり，ＳＢ13に切られている。

ＳＢ14

ＳＢ15・ＳＫ01によって切られた方形住居跡で，焼土を床面に検出した。焼土はＳＢ15の検出中に，その埋土に若干みられたので，ＳＢ15のカマドの可能性があるので，精査をおこなったが，ＳＢ15のカマドでなく，斜面のため，ＳＢ14の焼土がＳＢ15埋土に流入したと考えられる。

ＳＢ15

ＳＢ14を切った方形住居跡で，東側は削平されている。

ＳＢ17

Ｓ：15；Ｗ：10付近に位置する住居跡で，ＳＢ18より切られている。

ＳＢ18

ＳＢ17を切っている方形住居跡で，西北隅にベッド状遺構的遺構を有するが詳細は不明である。

ＳＢ19

ＳＢ17・ＳＢ18を切った住居跡であり，東壁・南壁に周溝を有する。北西隅・南西隅にベッド状遺構的なものをもつが，他に住居跡が重複している可能性もある。しかし，調査時には，不明であった。

ＳＢ20

ＳＫ03によって切られていた方形住居跡で，ＳＢ21と切合い関係は検出時にはなかった。北西隅に柱穴を検出している。

ＳＢ23

Ｓ：15；Ｏ：00付近に位置し，ＳＫ04より南側を切られ，東側は削平を受けている。方形住居跡を呈し，周溝を有し，全周すると考えられる。柱穴等は明確でなく，焼土等は削平されているであろう。

ＳＢ24

ＳＫ04・ＳＫ05に切られ，ＳＢ25を切っている方形住居跡である。ほぼ中央に貯蔵状穴の土壙を有するが，住居跡に伴うものか否かは決定できなく，遺物を出土していない。

ＳＢ25

ＳＢ24より古い住居跡で，西壁にやや巾広い周溝を有する。

ＳＢ26

ＳＢ25とは切合い関係はないが，ＳＢ25より新しい。

ＳＢ27

Ｓ：25；Ｅ：05付近に位置する住居跡で，ＳＫ06に切られ，ＳＢ25を切っている。東側は削平され，床面には，やや大きい柱穴を有する。

ＳＢ28

Ｓ：15；Ｅ：05付近に位置する方形住居跡で，検出時にはＳＢ29とは重複関係はなかった。床面には柱穴を２個検出できた。

ＳＢ29

ＳＢ28の東側に検出できた方形住居跡である。床面には，柱穴・焼土等は検出できなかった。

ＳＢ30

Ｓ：15；Ｅ：10付近に位置する方形住居跡で，西壁側一部をのこし，大半を削平され，南壁側周溝部で，ＳＢ100 と切り合い，それより後出する。周溝巾は約20～25cmで，深さ10cm前後である。

ＳＢ31

ＳＢ32・ＳＢ33・ＳＢ35・ＳＢ37等の方形住居跡と重複して検出したが，切り合い等は不明である。北壁側にベッド状遺構をもち，北西隅では柱穴を切っている。

ＳＢ32

周溝をもつ方形住居跡で，ＳＢ31の床面で検出し，ＳＢ31の床面で，ＳＢ32の床面は削平されていた。周溝巾約10～15cmで，深さ約５cmである。柱穴等は検出できなかった。

ＳＢ33

Ｓ：20；Ｅ：10の位置にする方形住居跡で，ＳＢ31等と同時に検出・調査した。床面で，柱穴２個・周溝を検出した。

周溝は壁に接していなく，ＳＢ33に属するものでないと考えられる。

ＳＢ34

周溝をもつ住居跡で，北西側をおこし，大半が削平されている。周溝巾約15～30cm・深さ約５cmを測る。

ＳＢ35

ＳＢ31に切られた方形住宅跡で，ＳＤ05を切っている。西壁には，２個の柱穴を検出し，土留め的役目をもつ支柱であろう。

ＳＢ36

ＳＢ35より新しく，周溝をもち，東・南側は削平され，柱穴等は不明である。

ＳＢ40

Ｓ：30；Ｏ：00付近に位置する方形住居跡である。この住居跡の検出では，層位の逆転等がみられ，困難した。床面では，遺物を検出できなかった。

ＳＢ42

西壁に周溝を部分的に有する住居跡で，大半が削平されている。柱穴等は検出できなかった。

ＳＢ44

Ｓ：30；Ｏ：00付近に位置する方形住居跡で，周溝を有する。ＳＢ45を切っている。周溝巾約20～25cm・深さ約10cmを測る。

ＳＢ45（第９図）

ＳＢ44に切られた方形住居跡で，周溝を有する。周溝巾約30cm・深さ約10cmを測る。床面には柱穴２個を検出した。

ＳＢ46（第９図）

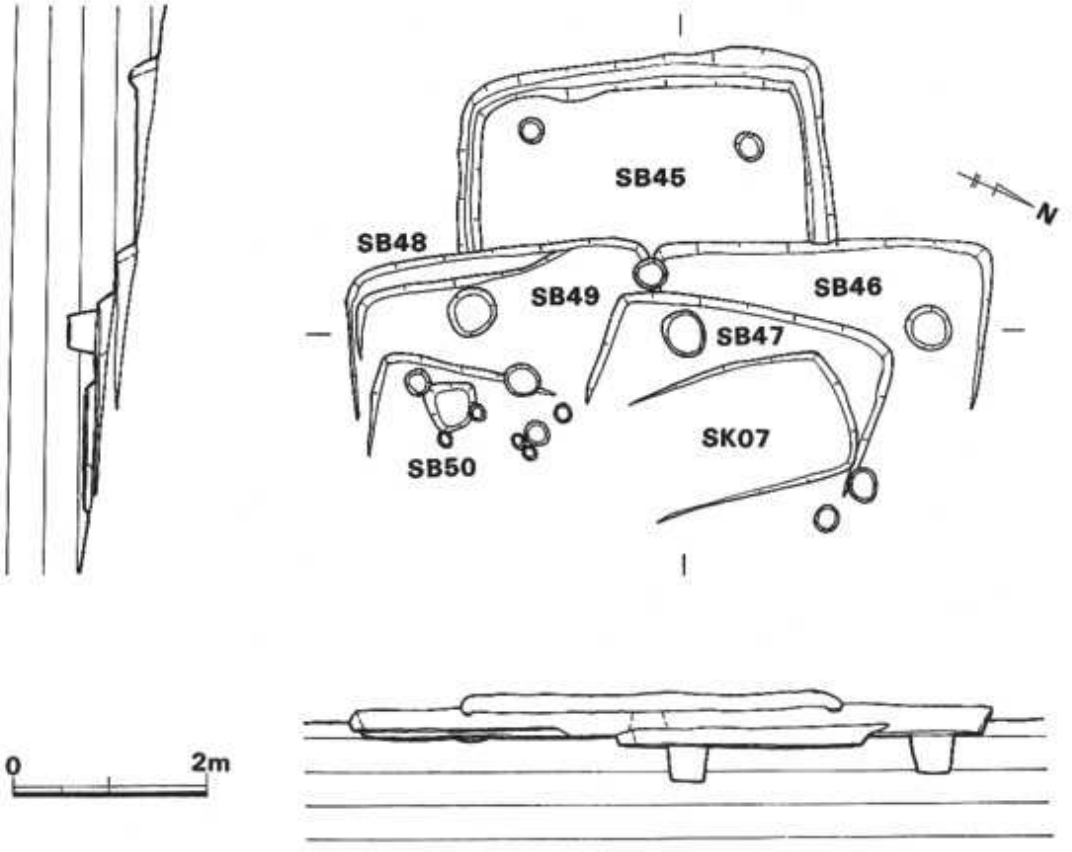
ＳＫ06に切られて検出した方形住居跡で，床面で柱穴を検出した。

ＳＢ47（第９図）

ＳＢ46より古く，ＳＫ07を切って，検出した方形住居跡である。床面には，やや大きい柱穴を２個検出した。

ＳＢ48（第９図）

ＳＢ49より新しい方形住居跡で，北壁部では柱穴で切られ，東側大半は削平されている。



第 9 図　SB45～SB50・SK07 実 測 図 (1/80)

ＳＢ51

Ｓ：35；Ｅ：05付近に位置する方形住居跡で，東壁は削平され，割合に遺構の保存がよい住宅跡であった。西壁側には，大きさ約120×70cmの貯蔵穴と考えられる土壙を，床面に検出した。

ＳＢ54

Ｓ：40；Ｅ：05付近に位置する方形住居跡で，周溝をもつ。西側壁部の周溝は，ＳＤ10に切られ，北側のみ残る。周溝巾は約15cmを測るが，大半が削平されている。

ＳＢ55

Ｓ：30；Ｅ：15の東側に位置する方形住居跡で，ＳＢ56を切っており，ＳＢ57に切られている。周溝は西壁側の一部を除き，全周するであろう。周溝の巾は約15～25cmを測る。

地権者等の問題で完掘できなかった。

ＳＢ56

方形住居跡であろうが，ＳＢ58によって完全に切られていた。ＳＢ55～ＳＢ61の中では最古

の住居跡である。

ＳＢ58

ＳＢ55～ＳＢ61の一群の住居跡中，最も新しい住居跡で，方形住居跡である。床面に柱穴を２個検出し，床面数cm上に須恵器・杯蓋・杯身を出土した。

ＳＢ59ａ

ＳＢ59ｂとほぼプランが同規模である。ＳＢ61を切って，ＳＢ58に切られている。埋土中より須恵器を出土したが，ＳＢ61のそれよりも新しい形態をみ，ＳＢ58のそれよりも古いので，ＳＢ59ａがＳＢ59ｂと重複するものであろう。柱穴は，西壁側に３個ならぶので，この住居跡のものであろう。

ＳＢ59ｂ

ＳＢ59ａに切られた，ほぼ同規模の方形住居跡で，西壁・南壁側に周溝を有する。この住居跡の柱穴と考えることができるものは１個であるが，他はＳＢ58・ＳＢ60の周溝部で壊崩したものと考える。床面に焼土をみる。

ＳＢ60

ＳＢ59ｂとほぼ同時期で，ＳＢ58・ＳＢ61に切られており，周溝をもつ。床面に柱穴２個と発掘区外にのびる焼土を検出した。周溝巾は約15～20cmを，深さは約10cmを測る。周溝上には，小形の甕・鉢を出土した。

ＳＢ61

ＳＢ59ｂ・ＳＢ60を切っている住居跡で，不整形を呈する。

ＳＢ62

Ｓ：50；Ｅ：00に位置し，ＳＢ64に切られていた方形住居跡であり，東側は削平を受けている。西壁は，土壙と重複していたと考えられる。

ＳＢ63

Ｓ：50；Ｅ：05付近に位置し，ＳＢ64によって切られ，大半は削平を受けている。

ＳＢ64

ＳＢ62・ＳＢ63を切っている方形住居跡であり，大半が削平されている。

ＳＢ65・ＳＢ66・ＳＢ67

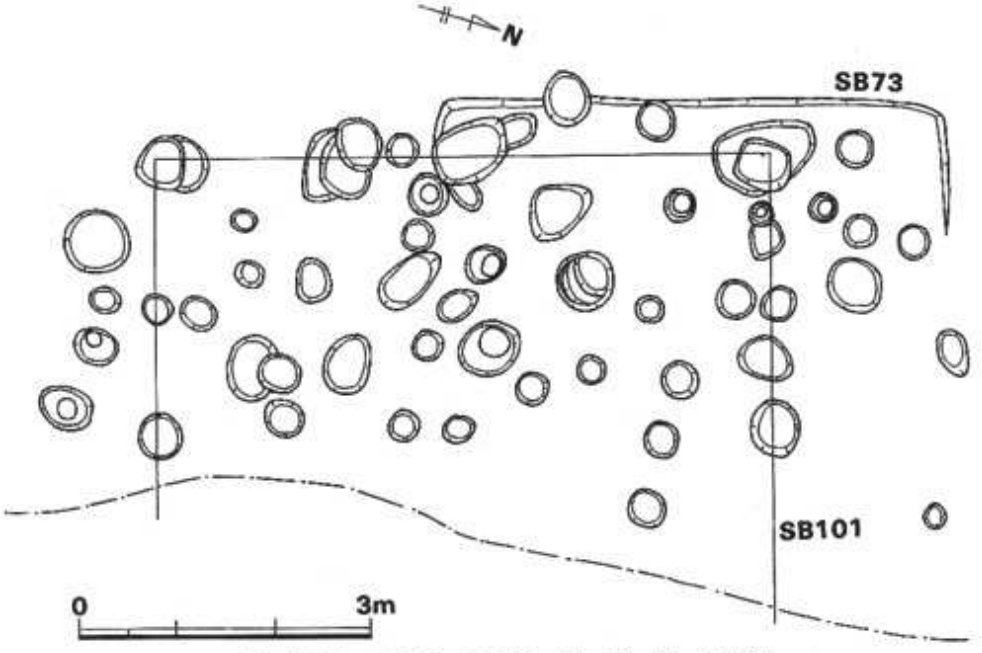
ＳＢ63・ＳＢ64に削平された住居跡で，周溝のみをのこす。ＳＢ65がＳＢ66・ＳＢ67を切っている。周溝巾は３軒ともに約15～20cmを測る。

ＳＢ68

ＳＢ69・ＳＢ70より新しく，大半が削平され，ＳＢ70の埋土等で柱穴は検出できなかった。

ＳＢ69

ＳＢ68より古い方形住居跡で，床面には３個の柱穴を検出したが，その内の１個はＳＢ69に



第 10 図　SB73・SB101 実 測 図 (1/80)

後出するであろう。

SB71

S：55；E：10付近で検出した方形住居跡で，SX13に後出する。南西隅にベッド状遺構的なものを有する。住居跡の重複も考えられる。

SB73（第10図）

S：50；E：15付近に位置する方形住居跡である。東側は大半が削平をうけており，また，SB101 とは重複して検出していない。

SB74

SB71の東側に位置する住居跡で，南西隅のみをのこし，大半は削平をうけている。

SB75

S：65；O：00に位置し，SB76より新しい方形住居跡で，SB76・SX12によって柱穴等は検出しえなかった。

SB76

SB75によって切られた方形住居跡である。南西隅にベッド状遺構をもつ。

SB77

SB75・SB76より新しく，SX12によって切られている。SB78とともに，戦前に耕作さ

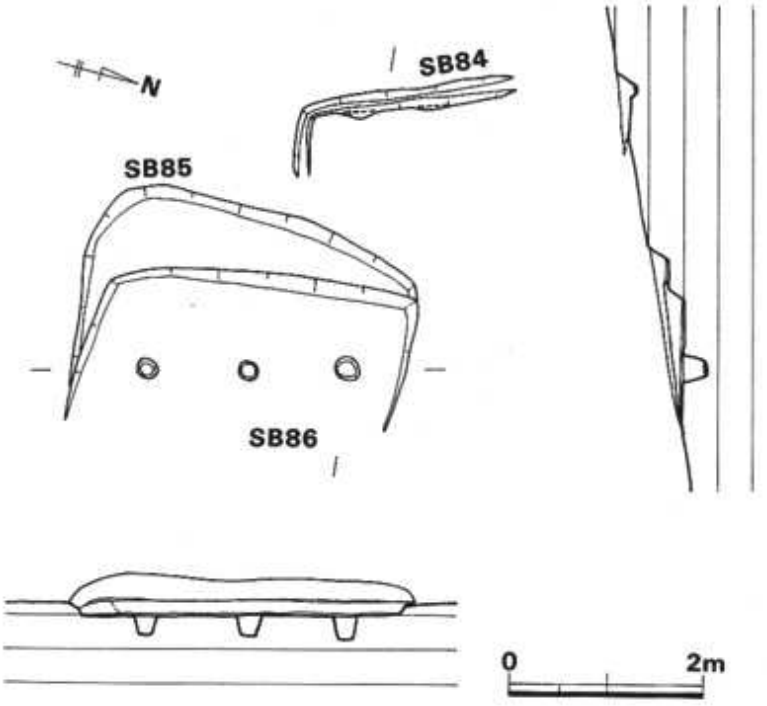
れた段々畑によって削平されていた。

ＳＢ78

ＳＢ77より古く，不整形を呈する方形住居跡である。

ＳＢ79

Ｓ：60；Ｅ：10に位置する方形住居跡で，西壁側をのぞいて，大半は段々畑によって削平を受けている。柱穴を段々畑の削平上端に１個をのこす。



第 11 図　SB84～SB86 実 測 図 (1/80)

ＳＢ80

Ｓ：60；Ｅ：15に位置し，ＳＢ81によって切られている。西壁のわずかと南壁を残す。

ＳＢ81

ＳＢ80・ＳＢ82を切った方形住居跡であろう。ＳＢ81の東側に，やや大きいピットを３個検出しているが，貯蔵穴等と考えがたい。

ＳＢ82

ＳＢ81に切られた方形住居跡である。床面に柱穴を２個検出した。

ＳＢ83

Ｓ：65；Ｅ：20付近に位置し，ＳＫ15に切られている方形住居跡である。西北隅にベッド状遺構を有し，床面で柱穴を重複して２個検出した。

ＳＢ84（第11図）

Ｓ：70；Ｅ：05付近に位置する周溝をもった方形住居跡である。周溝巾は約20cmを測り，床面もほとんど削平されて，深さもあまり目立たない。

ＳＢ85（第11図）

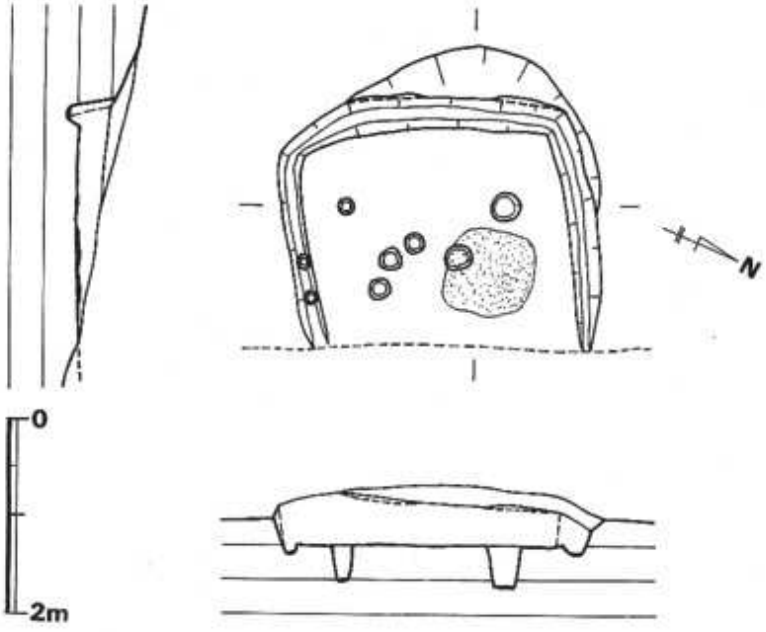
ＳＢ86に切られた不整形の住居跡である。

ＳＢ86（第11図）

ＳＢ85を切った方形住居跡で，ほぼ西側半分をのこし，東側は削平されている。床面では３個の柱穴を検出した。

ＳＢ88（第12図）

Ｓ：75；Ｅ：10付近で検出した，周溝を有する方形住居跡である。床面では６個の柱穴を検出したが，そのうち２個が主柱穴である。また，焼土を検出し，炉と考える。周溝は，東壁側に削平を段々畑で受けている。周溝巾は下端で約５cmを測る。南側の周溝には，２個の柱穴を検出しているが，これは，所謂，壁面土留用支柱の柱穴と考えられよう。



第 12 図　SB88 実 測 図（1/80）

ＳＢ89

Ｓ：75；Ｅ：15付近に位置し，ＳＢ90に切られている方形住居跡である。

ＳＢ90

ＳＢ89を切り，西南部に突出部をもつが，埋土等は同様であり，住居跡の一部と考える。床面には柱穴を１個検出した。

ＳＢ91・ＳＢ92

共に方形住居跡であろう。ＳＢ91がＳＢ92を切っている。

ＳＢ93

方形住居跡で西壁側のみを残す。ＳＢ91等とは重複していない状況で検出した。

ＳＢ94（第３図）

Ｓ：75；Ｅ：25付近に位置する周溝をもつ方形住居跡である。床面に検出した柱穴のうち，西壁側に３個の柱穴が並ぶが，この柱穴が住居跡に対応するであろう。周溝は，巾が西側で約

40～70cmで，深さ約20cmを測る。北側の周溝内に柱穴をみるが，ＳＢ88と同様に，土留め用の柱穴であると考える。

ＳＢ95（第13図）

Ｓ：85；Ｅ：15付近に位置する方形住居跡である。床面には３個の柱穴を検出し，西壁には，段をみる。東側は段々畑によって削平されている。

ＳＢ96～ＳＢ99

ＳＢ95の東側に位置する住宅跡で，方形を呈する。ＳＢ97はＳＢ99によって切られている。４軒とも柱穴をできないまでに，段々畑によって削平されていた。

掘立柱建物

ＳＢ100（第４・５図，第２表）

ＳＡ02の南側，ＳＢ30の東側に位置する２間×２間の総柱の建物である。柱間間隔は平均で 1.5ｍを測る。柱穴の５では柱痕径14cmを測る。

ＳＢ101（第10・14図，第３表）

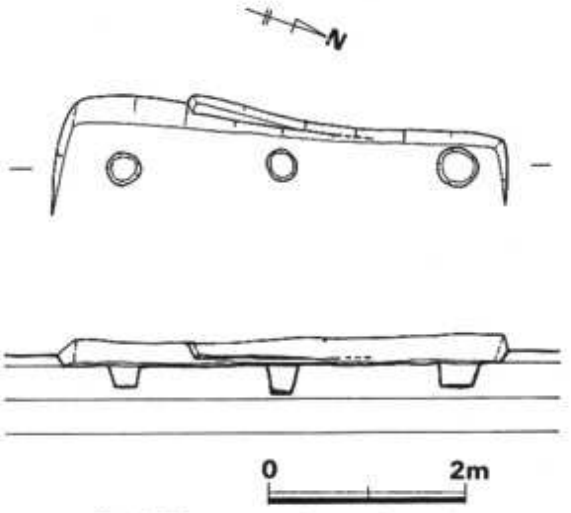
ＳＢ73の東側に位置する建物で，３間×（２＋α）間である。柱穴の３は検出していない。柱間間隔は，短辺で平均 2.1ｍを，長辺で平均 1.5ｍを測る。

ＳＢ102（第３図）

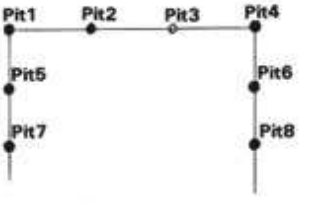
ＳＡ01・ＳＢ94の東側に位置する建物で，全容は不明である。柱穴の径は約40～60cmを，深さ40～50cmを測る。

ＳＢ103

ＳＢ55の埋土中に柱穴を検出した建物で，



第 13 図　SB95実測図（11/800）



第 14 図
SB101柱穴
位置模式図(1/200)

柱穴番号	大きさ 東西×南北	深さ	柱痕の径
Pit 1	56 × 52	70	－
Pit 2	54 × 42	71	－
Pit 3	－ × －		－
Pit 4	55 × 60	73	－
Pit 5	34 × 33	72	－
Pit 6	38 × 38	70	－
Pit 7	48 × 46	68	－
Pit 8	51 × 58	68	－

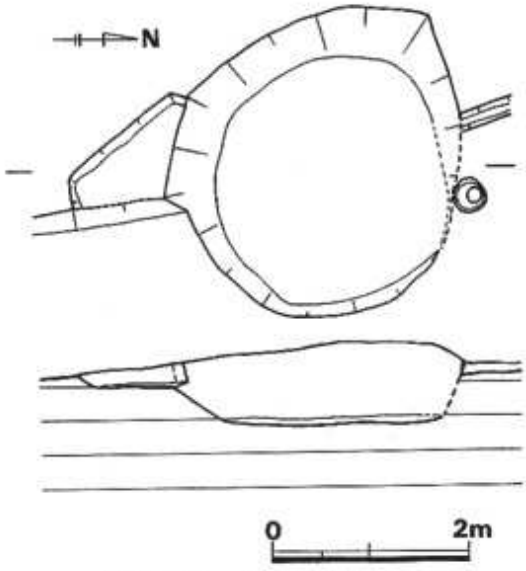
第８表　ＳＢ 101 柱穴計測表（単位：cm）

ＳＢ55より新しい。２間のみはわかるが，全容は不明であり，ＳＢ100と同様の建物と考えられる。

土　壙

ＳＫ01

ＳＢ08によって切られ，ＳＢ14・ＳＢ15を切っている。不整形を呈し，平面的に土壙の重複があるようであるが，検出時，切合い関係は認められなかった。



第 15 図　SK04実測図（1/80）

ＳＫ02

ＳＢ14・ＳＢ20に切られている方形の土壙で，西北隅は柱穴によって切られている。床面は，ほぼ水平で，柱穴を検出している。

ＳＫ03

ＳＢ21・ＳＢ22によって切られ，ＳＢ20を切っている不整形を呈する土壙で，東側の大半を削平されている。底面は舟底状を呈する。

ＳＫ04（第15図）

ＳＢ23・ＳＢ24・ＳＫ05を切ったほぼ円形の土壙で，底面はほぼ水平である。

ＳＫ05

ＳＢ24・ＳＫ04によって切られている土壙で，方形を呈する。底面はほぼ水平であり，東側は削平されている。

ＳＫ06

ＳＢ27を切って，ＳＢ46に切られているが，ＳＢ27・ＳＢ46・ＳＫ06はほぼ同時期であろう。不整形を呈し，底面は段を有するが，東側は削平されていると考えられる。

ＳＫ07（第９図）

ＳＢ47によって切られ，その床面の精査時に，検出した土壙で，方形を呈する。底面はほぼ水平である。

ＳＫ08

ＳＢ39を切ったほぼ円形を呈する土壙であり，床面はほぼ水平である。東側は削平されている。床面直上で弥生土器（高杯等）を出土している。

土壙番号	規模（cm）	形態	時期	備考	土壙番号	規模（cm）	形態	時期	備考
SK01	(386+α)×(205+α)	不整形	ⅢB	SK15・SB15を切っている	SK12	231×(250+α)	方形		SK14より新しい
SK02	205×(128+α)	方形		SB14・SB20に切られている	SK13	192 × 177	不整形		
SK03	145×(130+α)	不整形			SK14	(115+α)×(90+α)	方形？	ⅢB	
SK04	314 × 302	円形	ⅢB		SK15	164×(288+α)	不整形		
SK05	(150+α)×(80+α)	方形？	弥・後	SK04より古い	SK16	173×(120+α)	円形	ⅢB	
SK06	(210+α)×159	不整形			SK17	395×(152+α)	不整形	ⅡB	
SK07	(225+α)×139	方形			SK18	160 × 240	不整形	弥・後	
SK08	385×(230+α)	不整形	弥・後末		SK19	285×(112+α)	不整形		
SK09	202×(241+α)	方形	弥・後		SK20	180×(55+α)	方形？	ⅢB	
SK10	132×(152+α)	方形	ⅢB		SK21	(220+α)×(65+α)	不整形	ⅢA	
SK11	(125+α)×(205+α)	円形？			SK22	(96+α)×(56+α)	不整形	弥・後末	SD01を切っている

第9表　土　壙　一　覧　表

SK09

SB39の南側に位置する方形の土壙で，床面はほぼ水平である。東側は削平されている。

SK10

S：30；E：15付近に位置する土壙で，方形を呈する。床面はほぼ水平で，東北側は削平されている。

SK11

S:40;E:10付近に位置する土壙で，SB52より古い。ほぼ円形を呈し，東側が削平されている。

SK12

S：65；E：20付近に位置する土壙で，SK14を切っている。方形を呈し，南壁側・北壁側に柱穴を検出している。底面はほぼ水平であり，底面でSK13を検出した。

SK13

SK12の底面精査時に検出した不整形の土壙である。深さはあまりなく，底面はほぼ水平であり，柱穴を検出した。柱穴はSK13・SK12にともなうが不明である。

ＳＫ14

ＳＫ12によって切られた土壙で，方形を呈する。底面はほぼ水平であり，東側は流失している。

ＳＫ15

ＳＢ83を切って，検出した土壙で，隋円形に近い土壙である。東側は流失し，底面はほぼ水平である。

ＳＫ16

Ｓ：65；Ｅ：15付近に位置する土壙で，ほぼ円形を呈する。段々畑によって地山整形をうけている段の部分に検出したため，東側が削平されている。床面は水平である。

ＳＫ17

Ｓ：65；Ｅ：15付近に位置する土壙で，隋円に近い不整形を呈する。床面では，柱穴等を検出しているが，土壙に伴うかは，不明である。東側は削平されている。

ＳＫ18

ＳＫ17の東側に位置する不整形を呈する土壙で，柱穴と切合っている。

ＳＫ19

Ｓ：40；Ｏ：00付近に位置する土壙であり，円形を呈する。底面はほぼ水平であり，東側は削平されている。

ＳＫ20

ＳＢ61を切っている土壙で，ほぼ方形を呈するであろう。ＳＢ60等と同様に調査区外にのびているため，全容をあきらかにできなかった。

ＳＫ21

Ｓ：15；Ｗ：10付近に位置する土壙で，不整形を呈する。ＳＢ17等によって切られている。底面はほぼ舟底状を呈する。

ＳＫ22

Ｓ：05；Ｗ：15に位置する土壙で，ＳＤ01を切っている。不整形を呈し，底面は丸味のある舟底状である。

溝

ＳＤ01

Ｓ：10；Ｗ：15付近に位置し，ＳＫ22によって切られている。長さ約 3.9ｍ・巾0.4 ～ 0.6ｍを測る。南端では，ＳＤ02と接続するが，別遺構であり，北端では，ＳＸ01と重複する。切合いは不明である。

ＳＤ02

ＳＢ17・ＳＢ18の西側に位置する溝で，北端では，ＳＤ01に接続するが，別遺構である。長

さ約 7.5m・巾0.35～ 0.5mを測り，柱穴等を切っている。溝南部の東側は流失し，西壁のみがのこる。

ＳＤ03

ＳＸ02の調査後，検出した溝で，ＳＸ02より古い。長さ約 8.4m・巾0.25～ 0.6mを測り，南端では削平されている。

ＳＤ04

Ｓ：05；Ｅ：10付近にまわる溝で，ＳＤ05を切っている。北端ではＳＢ01に切られ，東南端では削平されて，東側は不明である。残存全周長約13.7m・巾約0.35～0.95mを測り，南部で巾広く，西南部で巾狭くなっている。

ＳＤ05

ＳＤ04に切られた溝で，南部ではＳＢ35によって切られ，東部ではＳＢ100 付近で削平されている。残存全周長約19.3m・巾約 0.4～0.75mを測り，西北部ではやや巾広い。

ＳＤ06

Ｓ：20；Ｅ：15付近に位置する溝で，長さ約 2.6m・巾約 0.4mを測り，両端で消失する。

ＳＤ07

ＳＤ06の南側に位置する溝で，両端が削平されていた。長さ約 2.5m・巾約 0.4mを測る。検出時ＳＤ05に続く溝ようであったが，別遺構のようである。底面には柱穴を検出している。

ＳＤ08

Ｓ：35；Ｅ：05付近で検出した溝で，長さ約 5.1m・巾約0.3 ～ 0.4mを測る。南側では消失し，北側では柱穴によって切られている。

ＳＤ09

ＳＤ08の東側に，ＳＢ36の西側に位置し，長さ約 4.2m・巾約0.45mを測る。南側では柱穴によって切られ，削平をうけ，北側ではＳＢ35によって切られ，他の住居跡群等に重複していた。

ＳＤ10

Ｓ：40；Ｅ：05付近に位置する「Ｌ」字状の溝である。ＳＸ05の調査に検出し，東側でＳＢ52によって切られている。長さ約 4.8m・巾約0.2 ～0.65mを測る。

ＳＤ11

ＳＤ10の南側に位置する溝で，長さ約 5.2m・巾約 0.2～0.45mを測る。西側の一部では，ＳＢ54の周溝を重複している。南側では消失し，東側ではＳＢ52・ＳＫ11によって重複していたであろうが，検出時は切合い等はなかった。

ＳＤ12

Ｓ：40；Ｅ：15付近に位置する溝で，長さ約 1.9m・巾約 0.3mを測る。東側では柱穴によ

って切られ，消失している。

ＳＤ13

Ｓ：45；Ｅ：15付近に位置し，長さ約 2.5ｍ・巾約0.45ｍを測る。北側では消失する。

不明遺構

上鐵子遺跡第３次調査では，丘陵の東側を調査し，その斜面に，住居跡等が立地している。よって，住居跡等の構築時に，低い方に客土を必要としたと考える。その客土を掘った部分であろう。また，それ以外の性格の遺構もあると考える。

以上のような遺構を不明遺構とした。

ＳＸ01

発掘区西北部に位置し，ＳＤ01と重複している。床面には柱穴を検出するが，住居跡でないようである。東側は消失・削平されている。

ＳＸ02

Ｓ：20；Ｗ：20付近よりＳ：30；Ｏ：00付近に位置する落込みで，西側斜面では段的部分をみる。ＳＸ02を調査した後に，ＳＤ03を検出した。

ＳＸ04

Ｓ：30；Ｏ：00付近に位置し，不整形を呈する。全容は不明である。

ＳＸ05

Ｓ：35；Ｅ：05に位置し，長細い形態を呈する。ＳＸ05の調査後，ＳＤ10などを検出した。

ＳＸ06

ＳＸ05の南側に位置し，不整形を呈する。

ＳＸ07～ＳＸ11

ＳＢ68～ＳＢ69の西側に位置し，不整形を呈する。

ＳＸ12

Ｓ：40；Ｏ：00付近に位置するもので，隅丸方形状を呈する。ＳＸ12を調査した後に，ＳＢ78を検出した。

ＳＸ13

ＳＸ11の東側で検出したもので，不整形を呈する。ＳＸ11調査後にＳＢ71を検出した。

ＳＸ14

発掘区中央部の西側で，須恵器大甕を単独で出土したが，遺構は検出できなかった。大甕はつぶれた状態であった。

（3） 遺　物

上鐘子遺跡群第3次調査では，住居跡・土壙・溝等より多量の土器（弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器），農工具としての石器（石鎌・石包丁）・漁具としての石器（石錘）・紡織具としての石器（紡錘車），装身具（ガラス小玉；滑石製管玉・勾玉）や武具としての石器（石戈）・鉄器（鉄剣）が出土した。

なお，以下の記述では，遺構に伴わない遺物については略述する。また，須恵器については小田氏編年を基準とした。

柵　列（柱穴列）出土土器

ＳＡ01・ＳＡ02

各柱穴より弥生土器の細片を出土したのみで，時期判定になりえない。

住居跡出土土器（第16～20図，第10・11表）

住居跡出土遺物は第10・11表にあらわすとおりである。

ＳＢ01

弥生土器

甕　口縁部を1個体出土し，弥生後期中頃に比定できる。

また，埋土中より中期後半の壺・高杯・短頸壺の細片をみる。

ＳＢ03

弥生土器

壺　後期に比定できる底部を出土している。埋土中より，弥生中期に比定できる甕を出土している。

ＳＢ04

弥生土器

甕　後期初頭に比定できる口縁・底部を出土する。また，埋土中には中期中頃の壺・短頸壺・甕の小片が出土している。

ＳＢ07

弥生土器

壺　後期前半に比定できる底部・胴部を1個体分出土している。また，中期中頃の土器もみ，鋤先口縁の壺などの小片である。

ＳＢ08

須恵器

杯蓋　1個体分出土している。

杯身　2個体分出土し，杯蓋とともにⅢＢ期の古式に比定できる。

住居跡	時期	弥生土器					石器	鉄器	砥石	住居跡	時期	弥生土器					石器	鉄器	砥石
		壺	高杯	甕	器台	その他						壺	高杯	甕	器台	その他			
SB01	弥・後・中			1						SB38	弥・後・初								
SB03	弥・後・後半	1		1				○		SB39	弥・後・前半								○
SB04	弥・後・初			2						SB40	弥・後・？						◎		
SB07	弥・後・前半	1								SB42	弥・後・初	1							
SB10	弥・後・初	1		2	2			○		SB43	弥・後・初	1		2			○		
SB11a	弥・後・初	1							○	SB44	弥・後・初？								○
SB14	弥・後・初	1		1						SB45	弥・後・後半		1						
SB15	弥・後・前半	1		2		1				SB46	弥・後・前半			1	1				
		(長頸)				(蓋)				SB47	弥・後・？								
SB20	弥・後・初頭	2		4	1	1				SB48	弥・後・？								
						(鉢)				SB49	弥・後								
SB23	弥・後・初頭			1	2					SB51	弥・後								
SB24	弥・後・中頃	1		2						SB54	弥・後								
SB25	弥・後・初		2	1			×			SB55	弥・後・後半			1	1	1	×		
SB27	弥・後・前半	1														(鉢)			
SB29	弥・後・初？						○			SB56	弥・後・初								
SB31	弥・後・前半？			2						SB59b	弥・後・初			1	1				
SB32	弥・後・初？									SB60	弥・後・初			2		1			
SB33	弥・後・前半	1		2		1										(鉢)			
						(小形鉢)				SB75	弥・後・？								
SB35	弥・後・初	1								SB76	弥・後				2				
SB36	弥・後・前半？					1				SB80	弥・後・？				1				
						(鉢)				SB85	弥・後								
SB37	弥・後・初									SB88	弥・後					1			

第10表　住居跡出土遺物一覧表①

○ 石包丁　◎ 石戈
△ 石錘　▲ 石斧
× 紡錘車

SB10

弥生土器

壺　底部・胴部片を出土している。

甕　口縁部・底部を2個体分の破片を出土。

器台　2個体分の出土をみる。壺・甕は弥生後期初頭に比定できる。

SB11a

弥生土器

住居跡	時期	土師器				須恵器									石器	鉄器	砥石	備考
		壺	高杯	甕	その他	杯蓋	杯身	高杯	瓮	坩	瓶	壺	甕	その他				
SB08	Ⅲ B					1	2											
SB09	Ⅲ B																	
SB11b	Ⅲ B	1		2		5	2				1	1	2					
SB12	Ⅲ B			2		2	4				1		1					
SB16	Ⅲ B						1											
SB17	Ⅲ A					1	1				1				▲		○	
SB18	Ⅲ B						2						1		△			
SB19	Ⅲ A					2		1										
SB26	Ⅲ B					(2)	2		2				2					Ⅵ・Ⅶ
SB41	Ⅲ B			1			1				1		1					
SB58	ⅢA～ⅢB	1				3	1											
SB59a	Ⅲ B					1	2											
SB61	Ⅲ A					1												
SB62	Ⅲ A					2												
SB63	Ⅲ B					(1)	(1)											Ⅴ
SB64	Ⅲ B					2												
SB71	Ⅲ B							1										
SB77	Ⅲ B						2		1						▲		○	
SB79	ⅢA～ⅢB	3	1	1		2	1						1					
SB81	Ⅲ B					1	1				1		2					
SB89	ⅢA～ⅢB													盤 1				
SB90	ⅢA～ⅢB			1						1								
SB91																		
SB94	Ⅲ A						1						1					
SB95			1															

第11表　住居跡出土遺物一覧表②

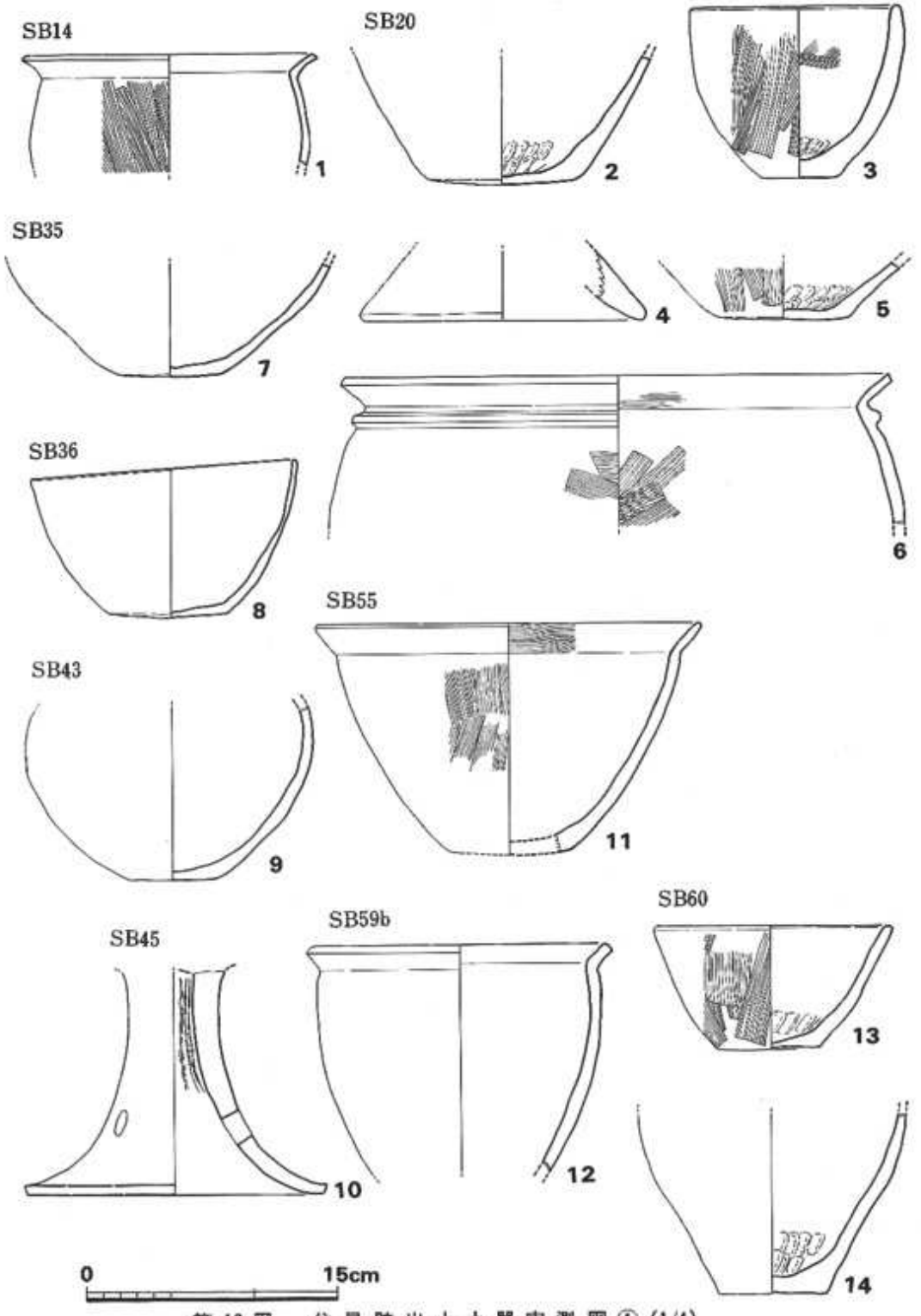
甕　口縁部・底部が出土し，胎土等より1個体であろう。後期初頭に比定できよう。

なお，埋土中に，中期の甕2個体・高杯を出土した。

SB11b

土師器

壺　1個体口縁部を出土している。



第16図　住居跡出土土器実測図①(1/4)

甕　2個体分の口縁部・底部等を出土する。

須恵器（第19図19・20）

杯蓋　5個体分出土している。

杯身　2個体分出土している。19は，口径10.8cm・器高 3.8cmを測り，胎土は砂粒を含むが，精選され，茶色気味の淡青灰色を呈す。

壺・甕・横瓶（？）　20は甕で茶褐色を呈する。その他壺・横瓶が出土している。

杯蓋・杯身等は，ⅢB期に比定できよう。なお，弥生中期の甕の小片も埋土中にみる。

SB12

土師器

甕　口縁部・胴部片を出土している。

須恵器（第19図21～23）

杯蓋　2個体分出土している。21は鈕を有し，胎土は精選され，灰白色を呈し，軟質で非常にあまい焼成である。22は，口径12.6cm・器高 3.5cmを測る。体部は横ナデで，部分的に横ナデを止めた指紋痕がみられる。天井部内面は横ナデ後ナデをみる。

杯身　4個体出土した。23は口径12.8cm・器高 4.2cmを測り，精選され砂粒を含まず，灰茶色を呈す。

横瓶・甕　各1個体出土している。

杯蓋・杯身の形態よりⅢB期に比定できる。なお，弥生土器（壺・甕）も出土している。

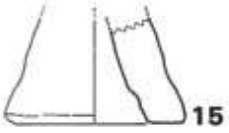
SB14

弥生土器（第16図1）

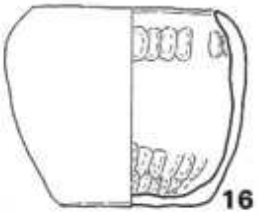
甕　1個体出土し，1は口径17.8cmで，口縁部は横ナデで，胴部にはハケ目をみる。後期初頭に比定できる。

なお，中期の開口壺・壺・甕を各1個体出土している。

SB80



SB88

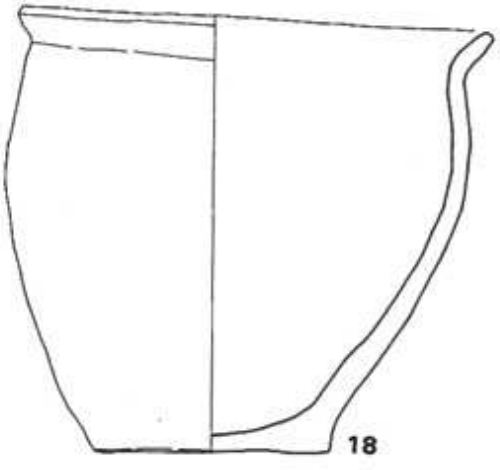


0　10cm

第 17 図　住居跡出土土器実測図②(1/4)

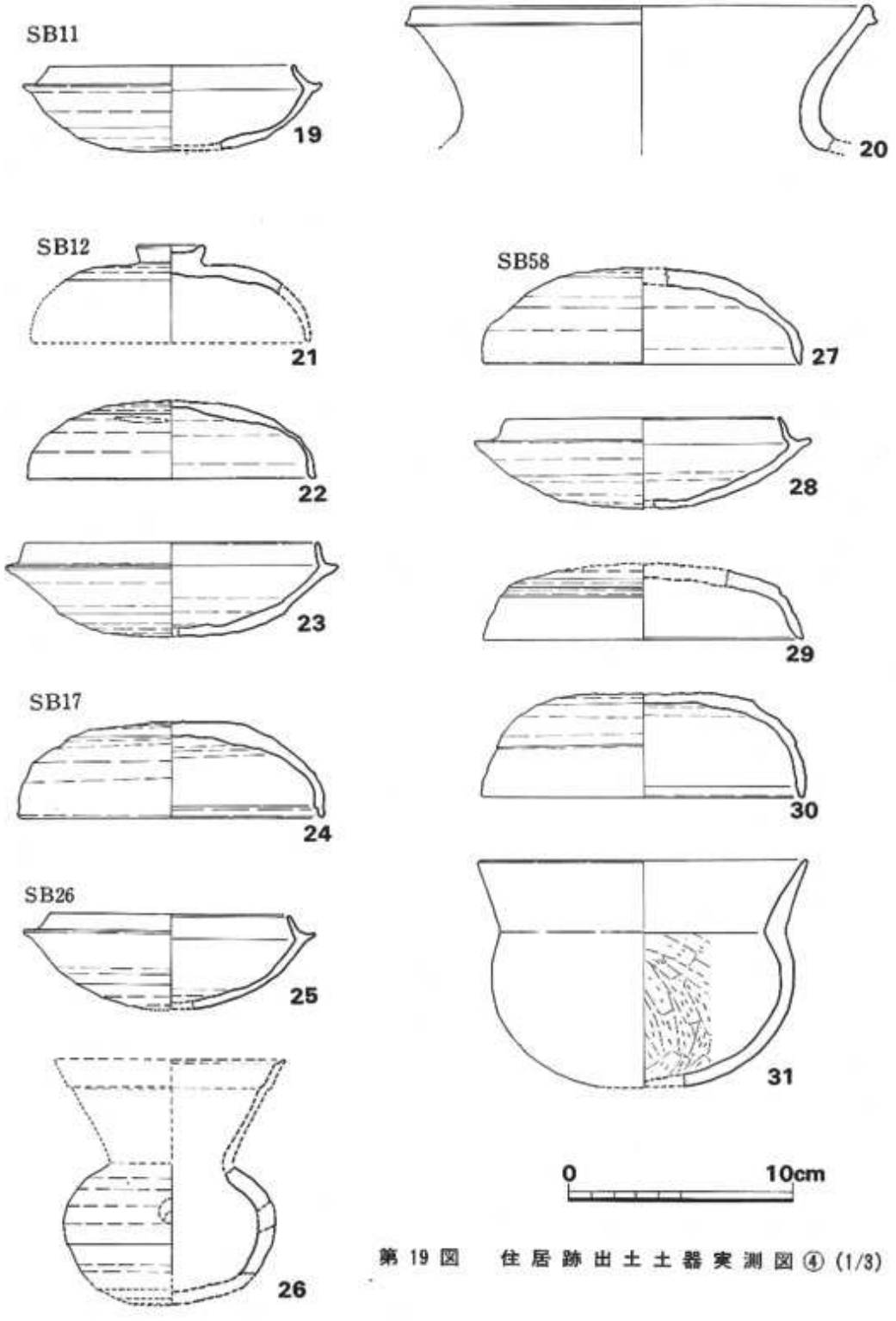
SB33

SB15



0　5cm

第 18 図　住居跡出土土器実測図③（1/2）



第19図　住居跡出土土器実測図④ (1/3)

ＳＢ15

弥生土器（第18図18）

壺　胴部を出土している。

甕　２個体出土し，１個体は小型の甕である。18は口径12.0cm・底径6.0cm・器高11.4cmを測る。外面は剥落し，内面は，口縁部が横ナデ，胴部が指頭圧痕後ナデている。

蓋　１個体出土しているが，壺とセットになるものでない。

ＳＢ15出土土器は後期初頭に比定できよう。また，中期の開口壺・甕の破片も出土している。

ＳＢ16

須恵器

杯身　１個体出土している。ⅢＢ期に比定できる。

ＳＢ17

須恵器（第19図24）

杯蓋　１個体出土し，24は，口径13.4cm・器高4.3cmを測り，口唇部内面に段をみる。胎土等は良好である。

杯身　１個体出土している。他に平瓶の口縁部を出土している。

杯等によりⅢＡ期に比定できよう。

ＳＢ18

須恵器

杯身　２個体分出土している。

甕　１個体出土し，内面に青海波叩き文をみる。

杯身より，ＳＢ18出土土器はⅢＢ期に比定できる。なお，弥生中期・後期の甕・高杯・器台等の出土をみる。

ＳＢ19

須恵器

杯蓋　２個体の口縁部等が出土している。

高杯　脚部が出土し，２段の透孔をみる。

ＳＢ19出土土器は，杯蓋の口唇部・高杯の２段透孔でⅢＡ期に比定でき，その他，弥生土器中期の壺・短頸壺・甕の破片や後期の壺の破片などが出土している。

ＳＢ20

弥生土器（第16図２～６）

壺　２個体を出土している。２は，底径8.8cmを測り，外面は剥落し，内面はナデられ，内底部には指頭痕をみる。５は，底径7.8cmで，外面にはハケ目をみ，内面はナデて，内底部に指頭痕をみる。

甕　4個体を出土し，6は，口径32.8cmを測り，頸部に突帯をみる。

器台　1個体を出土し，4は，底径16.7cmを測り，胎土は砂粒を含み，赤色化している。

鉢　1個体を出土し，3は，口径12.3cm・底径4.6cm・器高10.25cmを測り，胴部外面にはハケ目をみ，内面ではハケ目整形後ナデて，内底部には指頭痕をみる。

ＳＢ20出土土器の２～６は，すべて床面直上の出土で，後期初頭に比定できよう。

ＳＢ23

弥生土器

甕　1個体出土している。

器台　2個体の出土をみる。

ＳＢ20と同様にＳＢ23と同時期で後期初頭である。

ＳＢ24

弥生土器

壺　1個体胴部片が出土している。

甕　2個体分の底部・胴部片が出土した。

後期の中頃に比定できる。

ＳＢ25

弥生土器

甕　1個体分であろう口縁部が出土した。

高杯　脚部と杯部の接合部が出土した。

後期初頭に比定できる。

ＳＢ26

須恵器（第19図25・26）

杯身　2個体出土し，25は，口径10.6cmを測り，胎土等は良好である。

聴　26は胴部のみで，下半部にヘラ削りを有する。他にもう一個体出土している。

甕　2個体分の胴部片を出土し，青海波叩き文が異なる。

杯身等により，ⅢＢ期に比定できよう。

ＳＢ27

弥生土器

壺　底部の1個体分を出土した。後期初頭に比定できる。他に中期の甕の小片を出土した。

ＳＢ31

弥生土器

甕　2個体分の口縁部が床面直上に出土している。後期前半に比定できる。

ＳＢ33

弥生土器（第18図33）

壺　底部より１個体分が出土している。

甕　底部で２個体分が出土し，口縁部は１個体分であった。

鉢　小形品で，17である。口径9.0cm・器高3.4cmであり，口唇部は丸味がある。体部内外面には，３・４段の指頭痕の成形がみられる。砂粒を含み，黄茶色を呈し，軟質でややあまい。

ＳＢ33出土土器は後期前半に比定できよう。他に，中期の土器破片が混入していた。

ＳＢ35

弥生土器（第16図７）

壺　１個体が出土している。７は底径6.0cmを測り，外面は剥落し，内面はナデている。砂粒を含むが，割合良好で，黄灰色を呈する。

後期初頭に比定できよう。他に，中期後半である壺などを混入していた。

ＳＢ36

弥生土器（第16図８）

鉢　完形品が出土している。８は，口径15.8cm・底径8.1cm・器高8.9cmを測り，体部内外面はナデられている。胎土は砂粒をみず精選され，黄灰色を呈する。後期初頭～前半に比定できよう。

ＳＢ41

土師器

甕　口縁部１個体が出土している。

須恵器

杯身　１個体を出土している。

平瓶　胴部片を出土し，カキ目を外面に施こしている。

甕　胴部がのこり，青海波叩き文をみる。

ＳＢ41出土土器は，ⅢＢ期に比定できよう。他に，弥生後期の高杯等の破片を混入していた。

ＳＢ42

弥生土器

壺　底部を出土している。後期初頭に比定できる。他に，中期の破片の甕・高杯等を出土している。

ＳＢ43

弥生土器（第16図９）

壺　１個体分の胴部出土した。９は，底径5.0cmを測り，胎土は割合に砂粒を含み，黄色味のある灰茶色を呈し，やや軟質である。

甕　２個体分の口縁部を出土した。

ＳＢ43出土土器は後期初頭に比定できよう。

ＳＢ45

弥生土器（第16図10）

高杯　10の脚部１個体分を出土している。器表は剥落のため不明である。底径18.3cmを測り脚部はシボリ痕を内面にみ，円形の透孔を３ヶ所みる。

ＳＢ45出土土器は後期後半に比定できよう。他に，中期の短頸壺・壺の破片を混入していた。

ＳＢ46

弥生土器

高杯　脚部片を出土している。１個体分である。

器台　割合に粗製の胎土の器台を出土した。

後期前半に，ＳＢ45との切合い等により比定でき，中期の土器片を混入している。

ＳＢ55

弥生土器（第16図11）

甕　口縁部が１個体分を出土した。

器台　割合に粗製な胎土であり，１個体の出土である。

鉢　11は，口径23.0cm，底径7.4cm・器高13.7cmを測る。口縁部外面は横ナデで，内面はハケ目調整である。体部外面はハケ目で，内面はナデている。

ＳＢ55出土土器は後期後半に比定できる。わずかに須恵器が混入している。

ＳＢ58

土師器（第19図31）

壺　１個体出土している。31は，口径14.5cmを測り，胎土には若干砂粒を含むが，精選されており，赤茶色を呈し，やや軟質である。胴部内面はヘラ削りが施されている。

須恵器（第19図27～30）

杯蓋　３個体出土している。27は，口径14.0cm・器高4.3cmを測り，胎土等は坂元２号墳の墓道部左側石列出土の供献土器に類似している。29は，口径13.9cmを測り，肩部に沈線状のくぼみを有する。30は，口径14.0cm・器高4.6cmを測り，肩部に肩を有する。

杯身　１個体出土している。28は，口径12.0cm・器高14.8cmを測る。

ＳＢ58出土土器は，ⅢＡ期～ⅢＢ期に比定できよう。

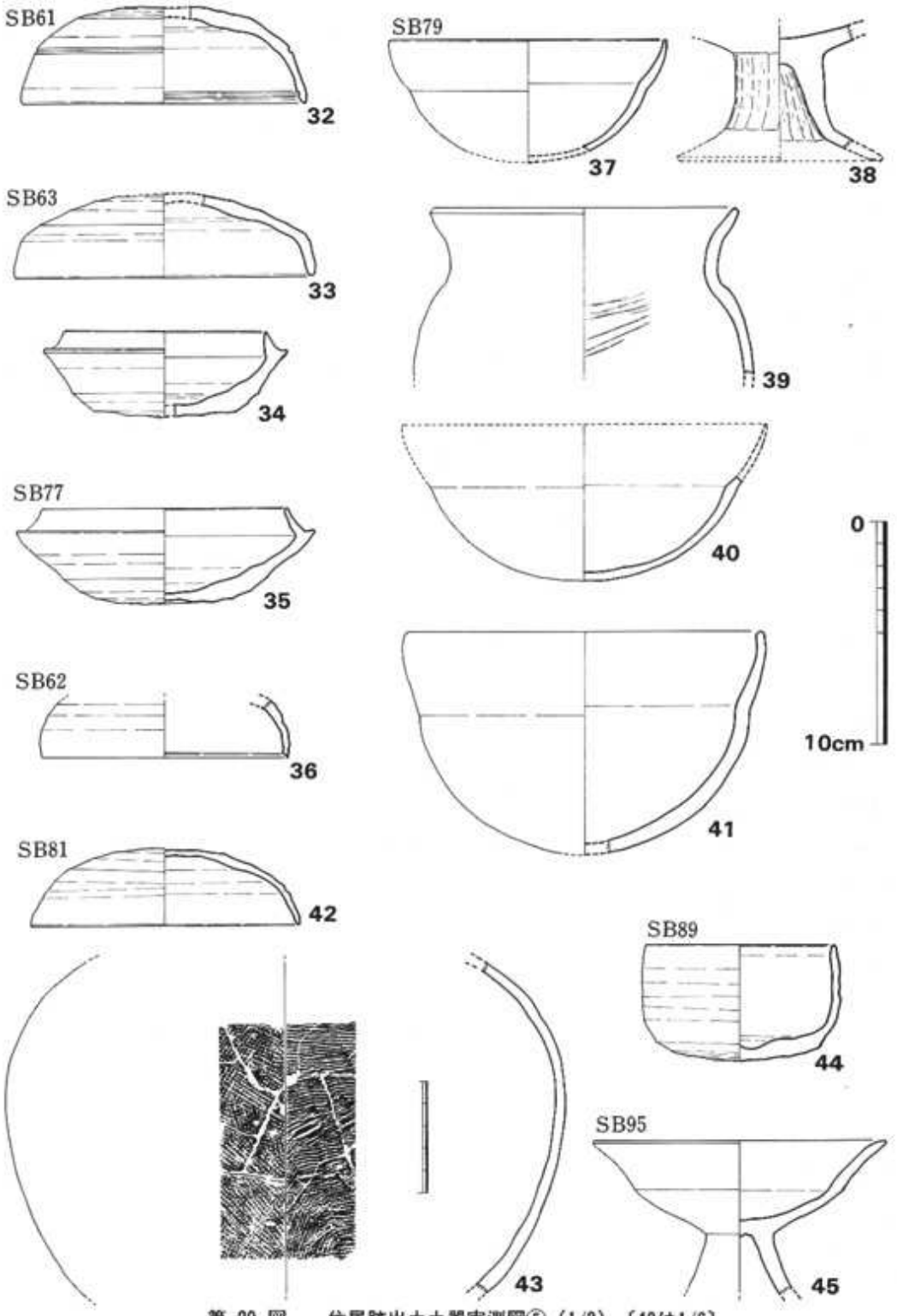
ＳＢ59ａ

須恵器

杯蓋　１個体出土している。

杯身　２個体出土している。

杯の蓋・身ともにⅢＢ期に比定できる。



第 20 図　住居跡出土土器実測図⑤（1/3）〔43は1/6〕

ＳＢ59ｂ

弥生土器（第16図12）

甕　底部を欠損する１個体を出土した。12は，口径18.0cmを測る。口縁部は横ナデで，胴部外面は剥落し，内面はナデている。

器台　１個体分の破片を出土している。

ＳＢ59ｂは後期初頭に位置づけられる。

ＳＢ60

弥生土器（第16図13・14）

甕　２個体分が出土している。14は，底径が6.6cmで，胴部内面はナデている。底部内面には指頭痕をみる。

鉢　完形品である。13は，口径14.1cm・底径6.1cm・器高7.3cmを測り，体部外面は指頭痕をみる。内面はナデている。底部内面は指頭痕をみる。

ＳＢ60出土土器は後期初頭に比定できよう。

ＳＢ61

須恵器（第20図32）

杯蓋　１個体出土している。32は，口径12.7cm・器高4.7cmであり，口唇部内面に沈線を有する。ⅢＡ期に比定できよう。他に，弥生中期の土器片を混入している。

ＳＢ62

須恵器

杯蓋　２個体分出土している。36は，口径11.0cmで，砂粒を含まず良好である。

ⅢＡ期に比定できよう。また，弥生中期の土器片等を含む。

ＳＢ63

須恵器（第20図33・34）

杯蓋　天井部に欠損をみる１個体が出土した。33は口径13.6cmで，精選した胎土であり，あまい焼成であり、灰色を呈する。

杯身　１個体出土しているが，これは混入であろう。34は，口径9.9cm・器高3.9cmで，わずかにあまい焼きであるが，胎土等は良好である。

杯蓋よりⅢＢ期に比定できよう。

ＳＢ64

須恵器

杯蓋　２個体分出土している。ⅢＢ期に比定できる。他に，弥生中期の土器片を混入していた。

ＳＢ71

須恵器

高杯　脚部を１個体分出土している。ⅢＢ期に比定でき，弥生後期の土器片の混入もみる。

ＳＢ76

弥生土器

器台　２個体分出土している。後期に比定できるものである。他に，中期の土器の混入をみる。

ＳＢ77

須恵器（第20図35）

杯身　２個体分を出土している。35は，口径11.1cm・器高4.2cmを測る。

甕　胴部片を１個体分出土している。

ＳＢ77出土土器はⅢＢ期に比定できよう。

ＳＢ79

土師器（第20図37～41）

壺　３個体出土している。37・40・41は，口頸部が外反しつつ，内湾するもので，底部は丸くおさめる。砂粒をわずかに含む胎土は，赤茶色乃至暗赤茶色を呈する。

甕　１個体出土している。39は，口頸部では横ナデで，胴部外面はナデで，内面には荒いハケ目をみる。

高杯　脚部のみがのこる１個体分を出土した。38の脚部内外面にヘラ削りをみる。

須恵器

杯蓋　２個体分が出土している。

杯身　１個体分が出土している。

甕　内面に青海波叩き文をみる胴部が出土した。

以上のような土器が出土したが，ⅢＡ～ⅢＢ期に比定できるようである。

ＳＢ80

弥生土器（第17図15）

器台　１個体出土している。15は底径9.2cmを測り，砂粒を含む胎土で，軟質であまい焼成である。

後期に比定できよう。

ＳＢ81

須恵器（第20図42・43）

杯蓋　１個体出土している。42は，口径12.0・器高3.45cmを測り，砂粒を含まず，精緻な焼きであり，淡淡灰色を呈する。所謂，赤焼き土器とされるものである。

甕　２個体出土で，１個体は，赤焼きである。43がそれで，外面は格子状叩き文で，内面は

平行叩き文である。

ＳＢ81出土土器は，ⅢＢ期に比定でき，弥生中期の土器片も混入している。

ＳＢ89

須恵器（第20図44）

盌　完形品の出土である。44は，口径8.3cm・器高5.2cmを測る。胎土には，砂粒を含むが堅緻で良好である。

ⅢＡ～ⅢＢ期に比定できよう。

ＳＢ90

土師器

甕　口縁部のみが出土している。

須恵器

坩蓋　１個体出土している。

時期はⅢＡ～ⅢＢ期に比定できよう。また，弥生土器の甕も混入して出土している。

ＳＢ94

須恵器

杯身　１個体出土している。

甕　口縁部と胴部で青海波叩き文をみるもので１個体であろう。

ⅢＡ期に比定できる。

ＳＢ95

土師器（第20図45）

高杯　脚部裾部を欠損するものを１個体出土した。45は，口径13.0cmを測る。砂粒を含むが，精緻な焼成である。

土壙出土土器

ＳＫ01

須恵器

杯蓋　小片であるが，２個体分の口縁部が出土している。

甕　内面に青海波叩き文をもつ胴部が出土した。

土師器

甕　口縁部が出土している。

ＳＫ01出土土器は，ⅢＢ期に比定できる。他に弥生中期の壺・甕が，後期の壺・甕・器台が破片として出土している。混入と考えられる。

ＳＫ02・ＳＫ03

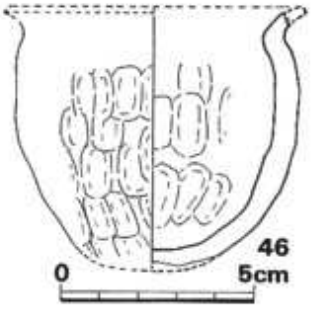
この２個の土壙には出土遺物はなかった。

ＳＫ04

須恵器（第23図50～53）

杯蓋　３個体あまり出土した。50は，口径12.3cmを測り，胎土には砂粒なく，精選されていて，焼きは精緻で良好である。赤灰色を呈し，所謂，赤焼きとされるものである。

杯身　４個体出土している。51は，口径10.8cmを測り，砂粒を含まない胎土で，精緻で良好であり，赤灰色を呈する。52は，口径11.4cm・器高4.6cmを測り，砂粒なく精選され，淡青灰色を呈す。焼成は良好である。53は，口径13.0cm・器高4.0cmで，精選された胎土で，精緻な焼きであり，赤灰色を呈する。51・52は赤焼き土器である。



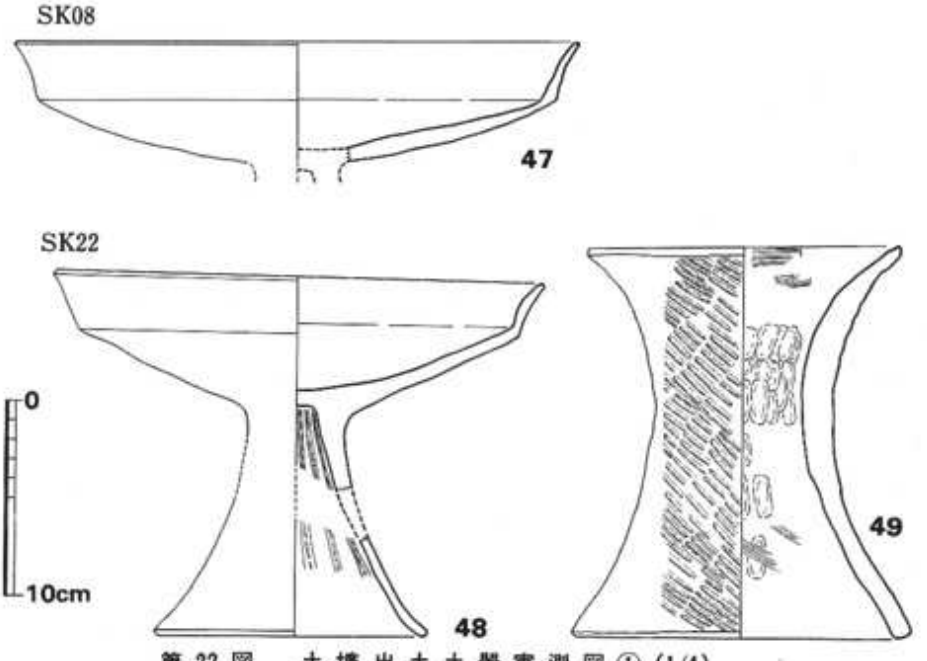
第 21 図　SK08出土土器実測図(1/2)

甕　青海波叩き文をもつ胴部と口頸部破片を出土している。

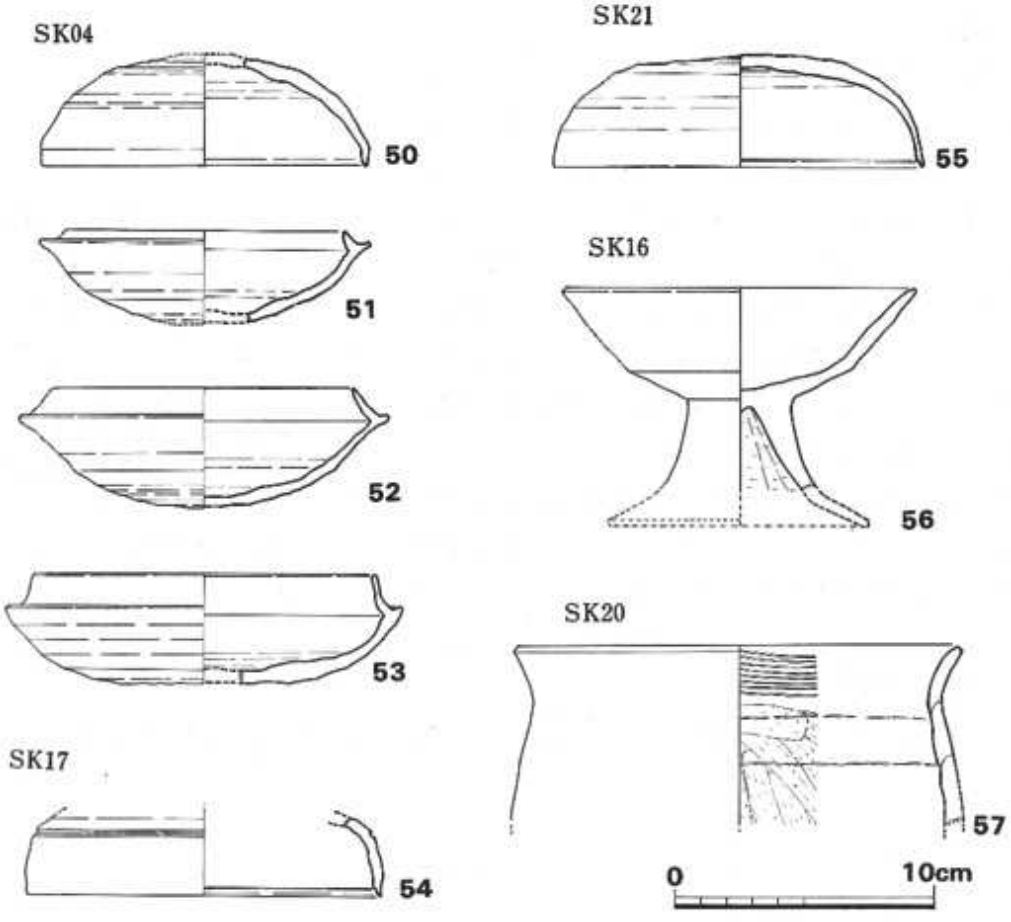
ＳＫ04出土土器の中で，53はⅢＡ期・50・52はⅢＢ期・51はⅣ期に比定できるように，比較的長期にわたる遺物が出土している。なお、ＳＢ04の土層は，舟底状を呈し，長期にわたって埋まったことがわかる。また，弥生土器の混入をあった。

ＳＢ05・ＳＢ06

ＳＢ05には出土遺物はなかった。ＳＢ06は弥生土器の混入はあったが，時期を決定し得るものではない。



第 22 図　土 壙 出 土 土 器 実 測 図 ① (1/4)



第 23 図　土 壙 出 土 土 器 実 測 図 ② (1/3)

ＳＫ07

弥生土器

甕　口縁部・胴部片を出土している。胴部にはハケ目調整・内面はナデている。

高杯　脚部を出土している。

出土遺物は，後期に比定できる。埋土には，中期の甕・高杯が混入していた。

ＳＫ08

弥生土器（第21図46・第22図47）

甕　小形の甕を出土している。46は，現存高6.0cmを測り，口縁部・底部外面を欠損する。胴部内外面には，指頭痕による成形後，ナデている。砂粒を含む粘土で，淡黄灰色で呈し，やや軟質である。

高杯　床面より，杯部が１個体出土した。47は，口径29.0cm・現存高6.1cmを測る。杯部口縁

部は内面よりナデて，わずかに外反させている。砂粒を含むが，割合に精緻されている。淡黄灰色を呈する。

ＳＫ08出土土器は後期末を呈する。他に，中期の壺の胴部等を混入していた。

ＳＫ09

弥生後期を出土したが，実測でき得るものでない。

ＳＫ10

須恵器

杯身　２個体分を出土している。

甕　胴部外面に格子目叩き文，内面に青海波叩き文をみる。

杯身等により，ＳＫ10はⅢＢ期に比定でき，埋土中には，弥生中期の甕の破片を混入していた。

ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ13

ＳＫ11には出土遺物がなく，ＳＫ12・ＳＫ13は小片のみで時期等を決定できるものでない。

ＳＫ14

土師器

甕　口縁部と把手を出土している。こしきと考えられるであろうが，底部の出土をみないので甕とした。把手は削り後，ナデている。

須恵器

杯蓋　２個体の破片を出土している。

甕　胴部を出土しており，胴部内面に青海波叩き文をみる。

ＳＫ14出土土器は杯蓋等によりⅢＢ期に比定できる。なお，弥生中期・後期の土器破片を出土している。

ＳＫ15

小片が出土しているが，時期判断になりえない。

ＳＫ16

土師器（第23図56）

高杯　１個体分出土し，脚部裾部を欠損している。56がそれで，口径13.3cmを測り，杯部は直線的に外反する。脚部内面にはヘラ削りをみる。器表には，杯部内外面・脚部外面に丹塗りが施されている。精選された胎土で，淡赤茶色を呈し，割合に良好な焼成である。

須恵器

杯身　２個体を出土している。

甑　胴部片が出土している。

ＳＫ16出土土器は，杯身・甑によりⅢＢ期に比定できる。土師器・高杯はやや時期がのぼるようである。

ＳＫ17

須恵器（第23図54）

杯蓋　１個体出土している。54がそれで，口径13.3cmを測り，肩部に沈線を有する。若干砂粒を含む胎土で，淡青灰色を呈する。

ＳＫ17出土土器はⅡＢ期に比定できよう。

ＳＫ18・ＳＫ19

ＳＫ18では，弥生後期の土器片を出土した。ＳＫ19では出土遺物はなかった。

ＳＫ20

土師器（第23図57）

甕　２個体が出土している。57は，口径17.2cmを測る。口頸部は外反し，外面は横ナデ，内面にはハケ目が残る。胴部外面にはナデをみ，内面にはヘラ削りをみ，粘土紐輪づみ痕をヘラ削りの部分に認める。

須恵器

杯身　１個体分出土している。

須恵器によりＳＫ20はⅢＢ期と比定でき，埋土中には，弥生中期の土器を混入していた。

ＳＫ21

須恵器（第23図55）

杯蓋　55の１個体を出土している。口径14.0cm・器高4.3cmを測り，口唇部に段を有する。精選された胎土で，茶色味のある青灰色を呈する。焼成は良好である。

ＳＫ21出土土器はⅢＡ期に比定できる。

ＳＫ22

弥生土器（第22図48・49）

壺　底部片が２個体分出土している。

高杯　48の１個体分出土している。口径25.3cm・底径14.1cm・復元器高18.3cmを測り，器表は剥落のため不明である。脚部内面にはシボリ痕をみる。石英質砂粒を含む胎土で，黄灰色を呈する。

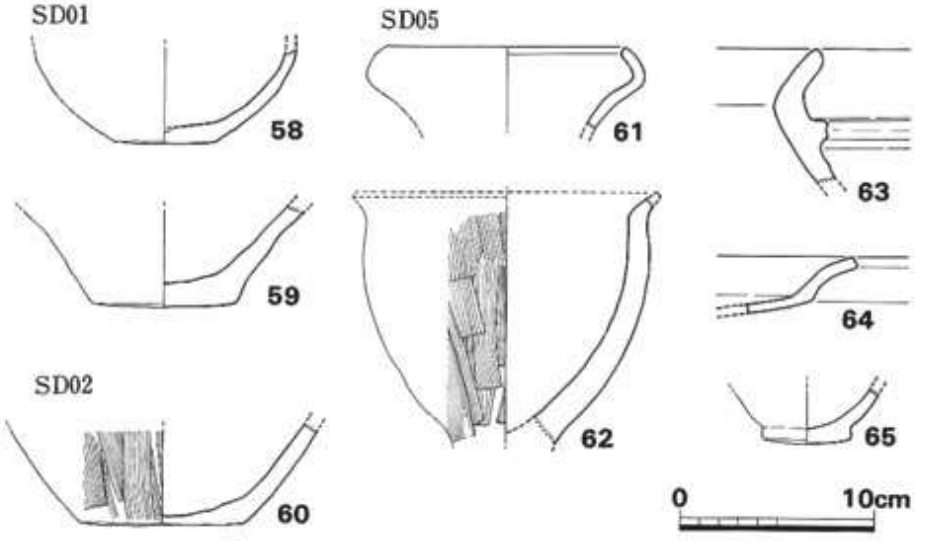
器台　49が出土している。口径16.1cm・底径17.4cm・器高20.0cmを測る。外面には平行叩き文をみる。内面上部には横方向ハケ目の後ナデをみ，中部には指頭痕がのこり，下部は，指頭痕成形後，ハケ目を施し，ナデている。

ＳＫ22は後期末と比定できよう。

溝内出土土器

ＳＤ01

弥生土器（第24図58・59）



第 24 図　溝出土土器実測図 (1/4)

壺　58は，底径5.2cmで，底部から胴部にかけて現存する。器表の外面は研摩的手法で調整され，内面からナデ調整がみられる。砂粒を含んだ胎土で，茶灰色で，やや軟質である。他に，2個体分の底部・胴部片等を出土している。

甕　59は，底径7.4cmを測り，器表内外面にはナデ調整がみられる。（ただし，59も壺・底部の可能性がある。）

ＳＤ01出土土器は後期初頭に位置づけられよう。

ＳＤ02

弥生土器（第24図60）

壺　60は，底径8.2cmを測り，器表外面にハケ目をみ，内面にはナデをみる。砂粒をあまり含まない胎土で，暗赤茶色を呈し，割合に良好な焼きである。外底部には簾状圧痕をみる。

他に，甕等を出土しているが，小片である。ＳＤ02出土土器は後期初頭～前半に比定できる。

ＳＤ03・ＳＤ04

ＳＤ03出土土器は弥生後期初頭に比定でき，ＳＤ04は後期に比定できる。

ＳＤ05

弥生土器（第24図61～65）

壺　61は，口径12.0cmで，器表は剥落していて，砂粒を含まない胎土で，茶黄色を呈する。

甕　62は，口縁部・底部を欠損するもので，胴部外面にはハケ目をみ，内面にはナデをみる。63は大型の甕である。

高杯　杯部の口縁の破片を出土した。

ＳＤ05は後期に比定できる弥生土器が出土したが，割合に長時期にわたっている。

ＳＤ08

弥生後期に比定できる土器が出土している。

ＳＤ09

弥生後期初頭に比定できよう。

ＳＤ13

弥生後期に比定できる。

ＳＤ06・07・10・11・12

弥生土器片は出土するが，時期を決定できうるものでない。

不明遺構出土土器

ＳＸ01

弥生土器

後期に比定できる壺・甕の破片が出土した。

土師器

甑　コシキの口縁部が出土している。

須恵器（第26図70）

杯身　70が出土している。口径11.0cm・器高4.2cmで，砂粒を含まない胎土で，黄灰色を呈し，軟質である。

甕　器表外面に格子状叩き文，内面に青海波叩き文をみる。

ＳＸ01出土土器はⅢＢ期に比定できる。

ＳＸ02

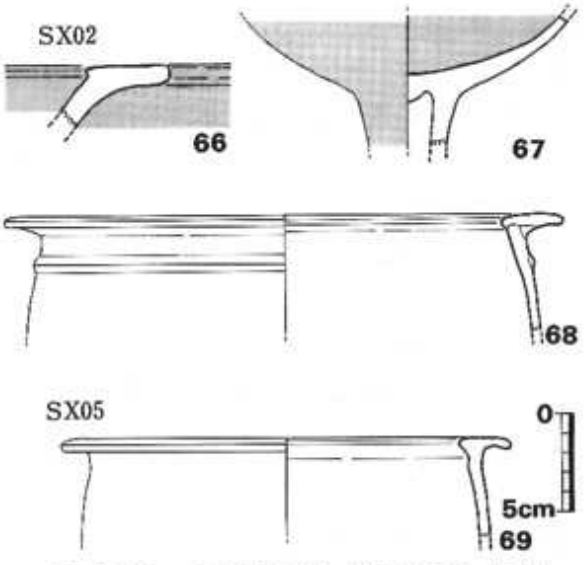
弥生土器（第25図66～68）

壺　66の鋤先口縁の壺である。器表内外面に丹塗りが施されている。

甕　68が出土している。口径28.7cmを測り，口縁部下に三角突帯を帖付つけいる。割合に精選された胎土で，褐色を呈する。

高杯　67が出土している。器表には丹塗りが施され，脚部には縦方向のヘラミガキをみる。精選された胎土で，黄灰色を呈し，良好な焼きである。

須恵器（第26図71～74）



第 25 図　不明遺構出土土器実測図①（1/4）

杯身　71～73が出土している。71は口径10.8cm・器高4.7cmを測り，砂粒なく，堅緻な焼きである。72は口径11.4cm・器高4.3cmを測り，精選された胎土で，暗黒灰色を呈し，精緻な焼成である。73は受部径14.1cmを測る。胎土等は比較的良好である。

高杯　74は出土している。脚部に透孔を有する。底径10.8cmを測る。

土師器（第26図75）

甕　口縁部は横ナデ・内面はヘラ削りをみる75を出土している。

以上の須恵器・土師器より，ⅢB期に比定できよう。

SX03

須恵器（第26図76・77）

杯蓋　76が出土している。口径13.0cm・器高4.15cmを測り，肩部に段を有する。割合に精選された胎土で，堅緻で良好である。

杯身　77が出土し，口径11.0cm・器高3.8cmを測り，精選された胎土で，精緻な焼きである。

SX03出土土器はⅢB期に比定できる。

SX05

弥生土器（第25図69）

甕　口径23.2cmを測り，精選された胎土で，黄灰色を呈する。69がそれである。

須恵器（第26図78）

杯身　78が出土し，口径11.1cmで，受部と立上り部で接合されている。胎土等は良好である。

SX05出土土器には弥生中期中頃・ⅢB期の遺物を含んでいた。

SX06

須恵器の杯蓋・杯身を各1個・甕を2個体分出土した。ⅢB期に比定できるようである。

SX07

須恵器の杯身2個・甕の胴部片を出土し，ⅢB期に比定できよう。

SX08

土師器

甕　口縁部が出土した。

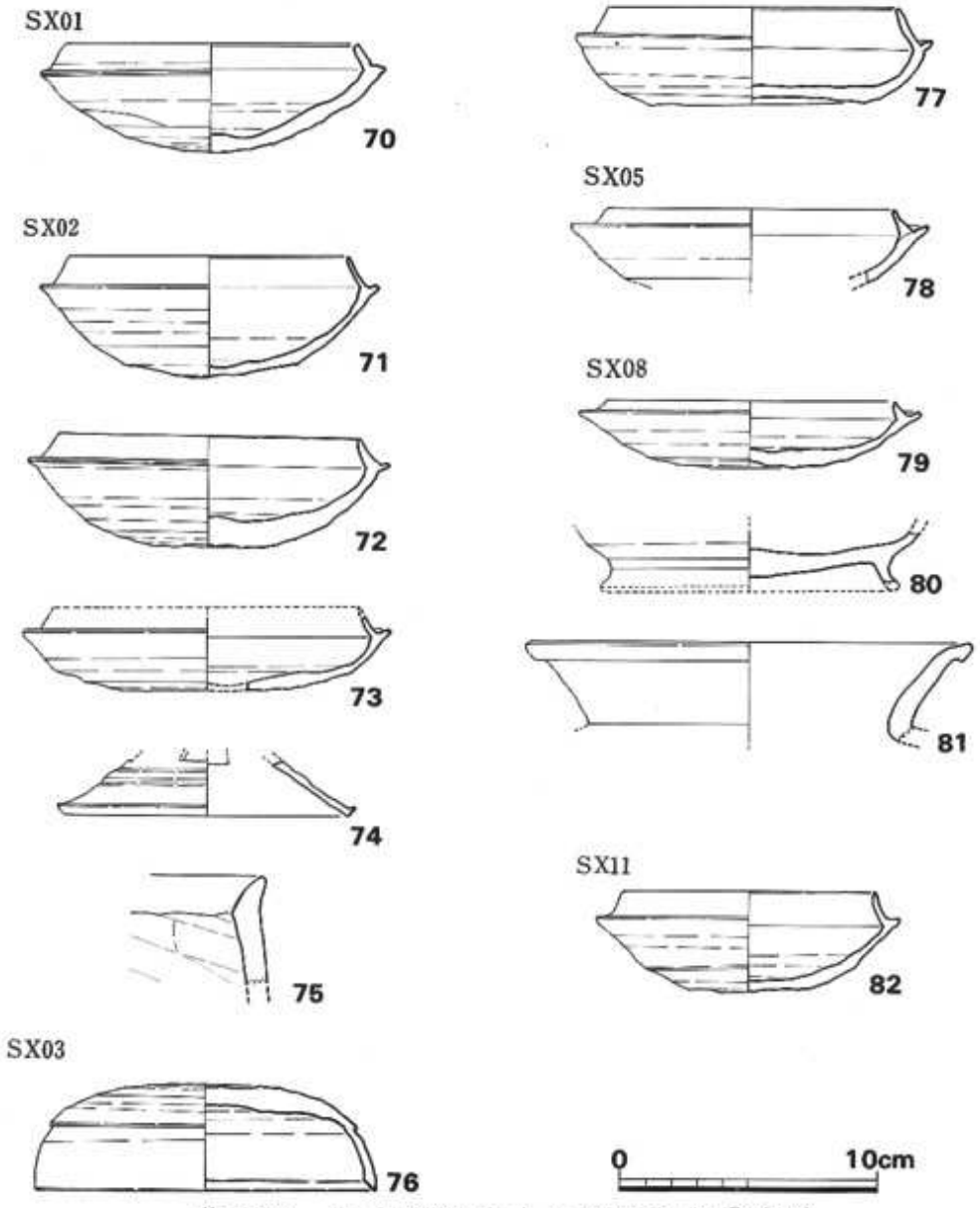
須恵器（第26図79～81）

杯身　4個体出土している。79は口径11.1cm器高2.6cmで，砂粒を含まない胎土であるが，ややあまい焼成である。80は，高台を有し，外底部はヘラ削りされている。

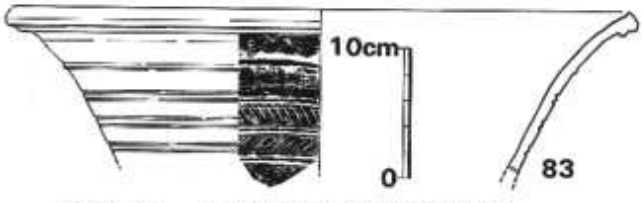
甕　81が出土している。口径17.0cmを測り，口頸部には横ナデをみる。

SX08出土土器で，78はⅢB期・80はⅥ期に比定できよう。他に，弥生土器の破片をも出土し，混入していると考えられる。

SX09

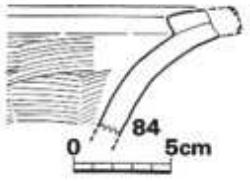


第 26 図　不明遺構出土土器実測図②（1/3）

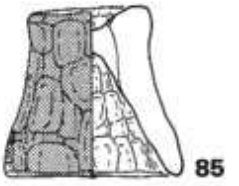


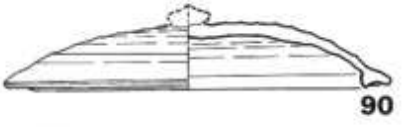
第 27 図　ＳＸ14出土土器実測図（1/6）

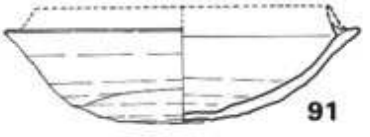
弥生土器・土師器・須恵器を混入して出土している。須恵器は，ⅢＢ期であり，杯蓋・杯身等が出土した。

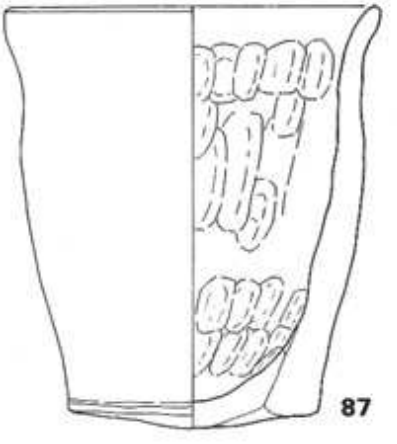


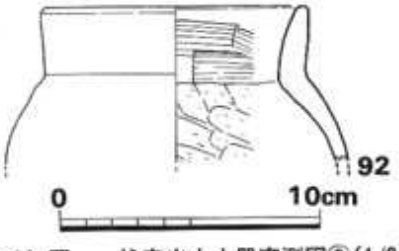
第 28 図
柱穴出土
土器実測図①(1/4)



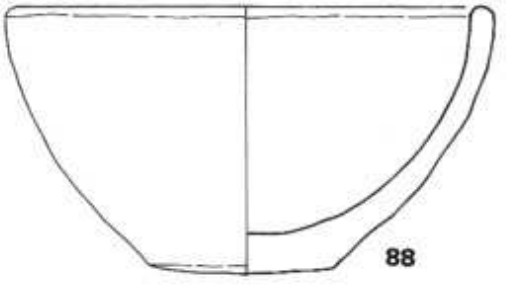








第 30 図　柱穴出土土器実測図③(1/3)



第 29 図　柱穴出土土器実測図② (1/2)

S X 10

須恵器の杯身２個体を出土し，ⅢＢ期に比定できよう。

S X 11

須恵器（第26図82）

杯身　82が出土している。口径9.8cm・器高3.9cmを測り，割合に精選された胎土で，精緻で良好である。やや小型であるが，口縁部立上り等はⅢＡ期に比定できる。

ＳＸ14

須恵器（第27図83）

甕　83が出土した。口径47.0cmを測る。口頸部に三角突帯・６条の沈線を施こし，沈線間に櫛目状工具の突刺文を施文している。胴部外面には格子目状叩き文をみ，内面に青海波叩き文をみる。

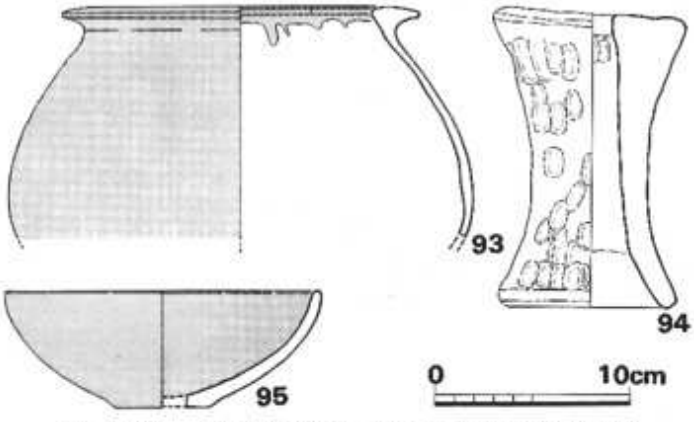
ＳＸ04・ＳＸ12・ＳＸ13

この３基の遺構では土器は出土しなかった。

柱穴内出土土器

弥生土器（第28・29図）

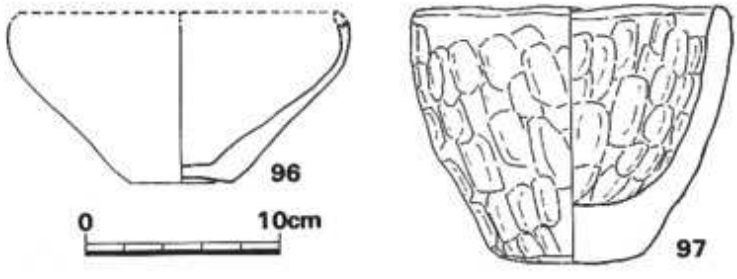
84は，弥生前期末の大甕である。口縁部は貼付けられ，器表外面には研摩をみ，内面にはハケ目をみる。Ｓ：80；Ｅ：25地区の柱穴出土である。85は，小型の器台である。器高4.4cmを測るもので完形品である。器表内外面には指頭痕をみ，胎土等は良好である。86は，小型の鉢であろう。指頭痕による成形である。Ｓ：40；Ｅ：10地区内柱穴出土である。87は，小型の甕で，口径9.6cm・底径6.3cm・器高10.85cmを測り，器表外面にはみがきをみ，内面には指頭痕の成形をみる。Ｓ：50；Ｅ：20地区内柱穴出土である。88は，小型の鉢で，口径12.4cm・底径4.8cm・器高6.9cmを測り，器表はナデをみる。胎土等は良好で，Ｓ：55；Ｅ：20地区内柱穴出土である。



第 31 図　S35;E05地区２層出土土器実測図①(1/4)

須恵器（第30図89～91）

89は，口径14.0cm・器高3.6cmを測り，胎土には砂粒を含むが良好であり，堅緻である。Ｓ：40；Ｅ：10地区柱穴出土内である。90は，鉢を欠損する杯蓋で，口径12.6cmを測る。胎土は良好であるが，ややあまい焼成であ

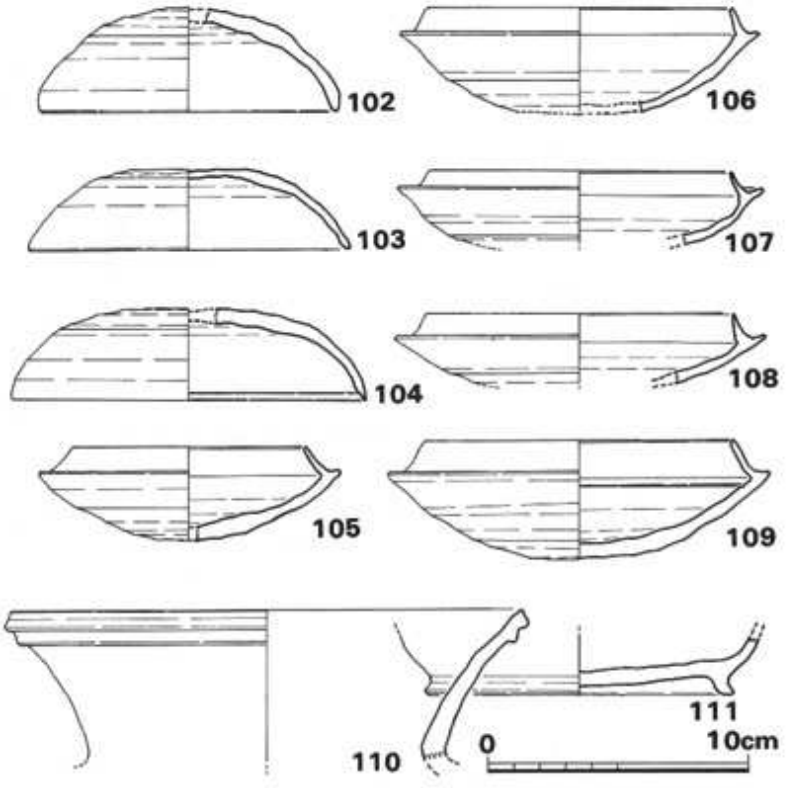


第 32 図　S35;E05地区２層出土土器実測図②（1/2）

る。S：40；E：15地区内柱穴出土である。91は立上りを欠損する杯身であり，受部径13.6cmを測る。胎土等は良好である。S：55；E：10地区内柱穴出土である。

土師器（第30図92）

92は口頸部が直線的に立上る壺である。器表外面は剥落している。内面は口縁部にハケ目をみ，胴部にヘラ削りをみる。S：30；E：20地区内柱穴出土である。

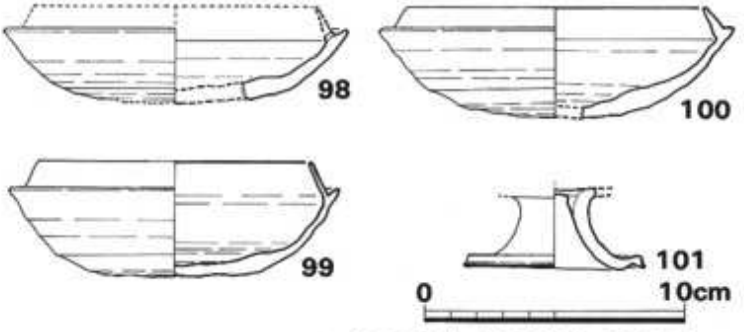


第 33 図　S35;E05地区 3 層出土土器実測図　(1/3)

S：35；E：05地区 2・3層出土土器

弥生土器（第31・32図）

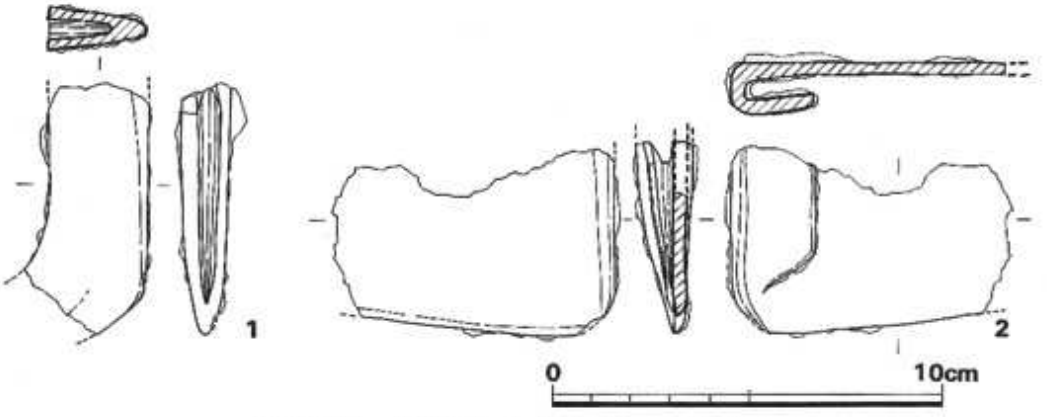
96は小型の鉢で，底径2.7cmを測り，胎土等は良好である。97は小型の鉢で，口径8.0cm・底径3.7cm・器高6.5cmで，器表には指頭痕の成形をみる。胎土等は良好である。93は短頸壺で，器表外面等に丹塗りをみる。口径18.3cmを測る。94は器台で，口径9.9cm・底径9.1cm・器高15.0cmを測り，器表外面に指頭痕の成形をみる。95は鉢で，口径16.3・底径4.8cm・器高6.0cmを測り，器表に丹塗りを施こす。93～97は2層出土である。



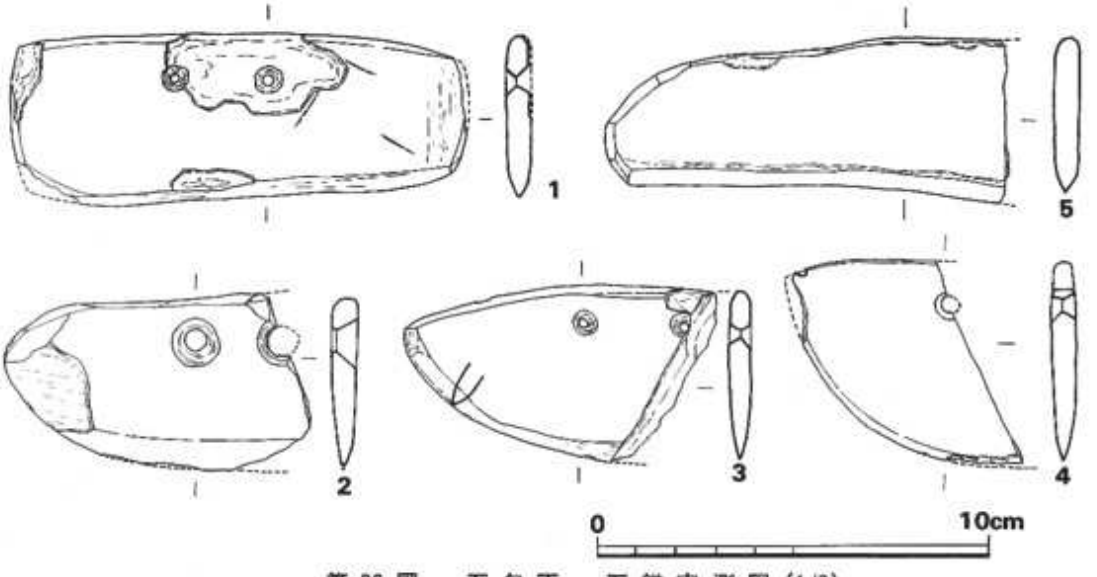
第 34 図　S30;E05;S35;E05地区 2 層出土土器実測図①（1/3）

須恵器

98～100は杯身で，口径10.5～11.3cm・器高4.3～4.5cmを測る。100はややあまい焼成であり，98



第35図　鉄鋤先・鉄鍬先実測図(1/2)



第36図　石包丁・石鎌実測図(1/2)

・99は胎土等は良好である。99はやや古式を呈する。101は高杯脚部で，底径7.0cmを測る。98～101は2層出土である。

102～104は杯蓋で，口径11.3～13.4cm・器高3.1～4.0cmであり，103は赤焼き土器である。105～109は杯身で，口径9.0～11.8cm・器高3.6～4.1cmを測り，109はややあまい焼成である。110は口径19.6cmで，横ナデ調整である。111は高台をもち，底径11.8cmを測る。ややあまい焼成である。

以上の102～111は3層出土である。

農工具

鉄鋤先（第35図1）

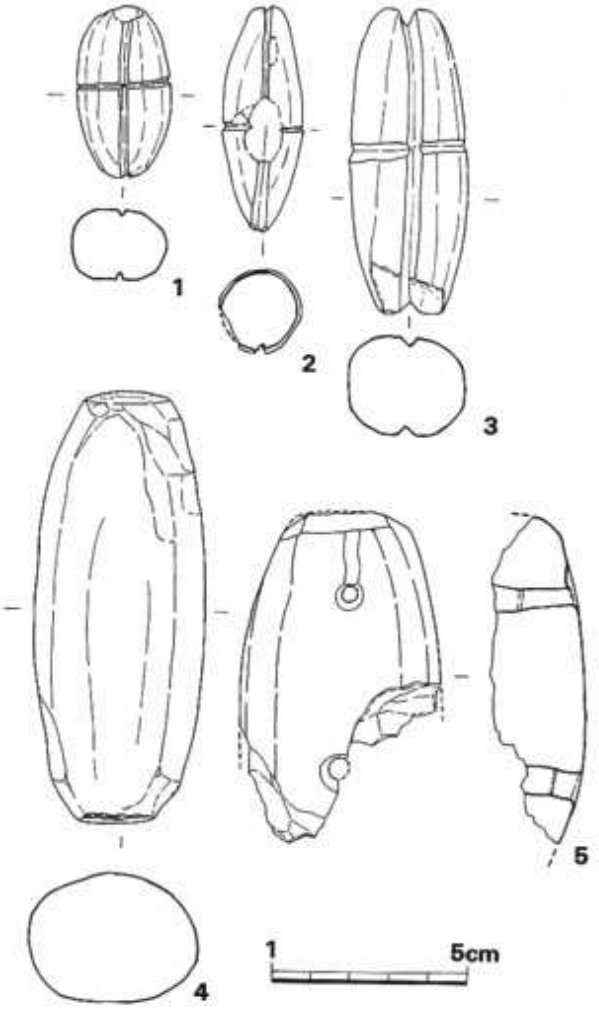
ＳＢ10の床面より出土した。鋤先の片側のみで，鋤の刃部等は欠損している。最も厚い部分は，12㎜である。木質部は残っていない。

鉄鍬先（第35図２）

ＳＢ03の床面出土である。片側の折曲げ部と刃部が現存している。厚さは3.5㎜で，折曲げ部は14㎜前後であり，木質部は残っていなかった。

石包丁（第36図１～４）

１は，Ｓ：20；Ｅ：05地区の３層出土である。側面部がわずかに欠損するが，ほぼ完形品である。輝緑凝灰岩製である。２は，Ｓ：40；Ｅ：05３層出土であり，ほぼ半分現存する。かなり使用されたものらしく，若干，風化しているようである。輝緑凝灰岩製である。３は，ＳＢ29出土であり，ほぼ半分現存する。刃部はわずかに欠けている。輝緑凝灰製である。４は，ＳＢ43埋土上層出土であるが，住居跡に伴わないものであろう。輝緑凝灰岩製である。



第 37 図　石錘実測図（1/2）

石鎌（第36図５）

Ｓ：15；Ｅ：10地区２層出土である。基部を欠損し，鎌の刃部先は研かれている。頁岩質であろう。

漁具

石錘（第37図）

１は，Ｓ：55；Ｅ：15地区３層出土で，十字に溝を施している。滑石製である。２は，ＳＢ18埋土中出土であり，１と同様に溝を有する。滑石製である。３は，Ｓ：35；Ｅ：05地区３層出土で，一部を欠損する。十字に溝を有し，滑石製である。４はＳＤ06出土で，両端に平担部をみる。硬質の砂岩質で，完形品では２個の孔をもつものであろう。５は，Ｓ：40；Ｅ：15地

Ⅳ　まとめ

上鐘子遺跡群は，今回の第３次調査と第１・２次調査との検出遺構を合せると，住居跡 102軒・掘立柱建物５軒・柵列（柱穴列）２条・土壙22基・溝15条[註1]の生活遺構，土壙墓２基・方形溝状遺構１基の埋葬遺構，不明遺構14ヶ所を検出したことになる。

以上の調査結果にもとづいて，若干の問題点を記述する。

住居跡の時期と立地について

第３次調査では，42軒の住居跡が弥生時代後期初頭から後半までに比定でき，25軒の住居跡は小田富士雄氏須恵器編年のⅢＡ期～ⅢＢ期にできよう。古墳時代前期・中期の住居跡が調査によって検出していないが，この時期の住居跡は他の丘陵に存在していると考えられる。なお注意すべきことは，伊都国の中心的な遺跡である三雲遺跡群[註2]では，布留期に比定できる住居跡がほとんど焼け，住居跡建材が炭化して検出していることであり，「倭国大乱」の歴史的記述と結びつけられないでもないが，上鐘子遺跡群では，弥生時代後期後半の住居跡が焼けてないので，前述したように他の丘陵等の立地等の要因を考えなければならないであろう。

次に，住居跡を時期毎に考えてみたい（第41・42図）。

弥生時代初頭では，調査区内で，比較的北側に立地している。また，若干の住居跡の重複はあるが，ほぼ３群または４群に分れるようである。

後期前半では，１群を除けば，初頭の群をほぼ踏襲して，２群または３群に分れ，立地している。

後期中頃では，前半の群を１つ踏習し，１軒が立地し，別の地区に１軒が立地して，２群に分れる。

後期後半では，初頭から中頃までの４群または５群の中での３群に，それぞれ１軒ずつ分れ，立地している。

このように，平面的に弥生時代住居跡の立地等をみれば，４群または５群に分れる。このことは，共同体，集合等を考えられようが，調査地が丘陵斜面であることや生産遺構・埋葬遺構が不明確であることから，平面的な群の指摘に留めておきたい。

古墳時代の住居跡では，ⅢＡ期・ⅢＡ～ⅢＢ期とⅢＢ期の２期に住居跡を区別して，その立地をみてみたが，比較的広範囲に立地して，群として把えることは不可能である。

さらに，弥生時代の住居跡は比較的北側に立地していることは，水田などの生産遺構が北側の丘陵間にある低湿地にもとめることができよう。古墳時代の場合は，住居跡が広範囲に立地することから，生産遺構等は南側・西側の低湿地にもとめることができよう。なお，北・南・西の３方向の低湿地は現在水田として利用されている。

弥生時代後期初頭期の住居跡

弥生時代後期前半期の住居跡

弥生時代後期中頃の住居跡

第 41 図　住居跡時期別配置図① (1/900)

弥生時代後期後半期の住居跡

古墳時代ⅢA・ⅢA～ⅢB期の住居跡

古墳時代ⅢB期の住居跡

第 42 図　住居跡時期別配置図② (1/900)

弥生時代住居跡の形態について

弥生時代の住居跡は，ＳＢ05・ＳＢ33・ＳＢ45・ＳＢ59ｂ・ＳＢ60・ＳＢ88などに代表されるように，底面に周溝を有し，４本と推定される主柱穴をもっている。また，炉と考えられる焼土も検出している。ＳＢ88の周溝にみられるように，小柱穴を検出しているが，住居跡壁面の土留めの支柱穴と考えられる。また，周溝を有しない住居跡も存在する。

古墳時代住居跡の形態について

ＳＢ86・ＳＢ94・ＳＢ95に代表されるように，古墳時代の住居跡では，床面に３個の柱穴を検出しているが，本来は，２間×２間あるいは，２間×１間の主柱穴をもつ住居跡であろう。また，この遺跡群では，この時期の住居跡にみるべきカマドを１軒も検出していない。このことは，次のような理由によるものであろう。遺跡の立地が丘陵の東側斜面であり，ほとんどの住居跡が東側を流失または削平をしている。さらに，年間の中で，比較的西方向からの風が吹き，特に冬などは異さらである。よって，西方向からの風を考慮すれば，カマドは住居跡の東壁に付設されていたであろうと考えている。

溝と住居跡との関係について

13条検出した溝の中で，ＳＤ04・ＳＤ05は弥生時代後期に比定でき，ＳＤ04はあたかもＳＢ04を取り囲むようにめぐっている。ＳＤ05は他に概当する住居跡もあろうが，ＳＢ29を取り囲んでいるようである。このような平面的な関係から，溝は，住居跡への雨水などの流入をふせぐための排水溝であると考える。なお，第１・２次調査でも検出されている。

掘立柱建物について

３軒の掘立柱建物を第３次調査で検出し，第１・２次調査分とあわせると５軒を調査したことになる。最近，この掘立柱建物を居住用建物としてとらえようとしているが，[註3] 石野氏[註4]の指摘もあるように，遺物が少ないという現状で，また，当遺跡群のように調査区が制限されている場合，周辺の調査も不可能である。なお，３軒の掘立柱建物の時期決定できる遺物は出土しなかった。

砥石・工作台を有する住居跡について

弥生時代住居跡の中で砥石を出土したものは，ＳＢ11ａ・ＳＢ39・ＳＢ44であり，工作台と推定される魂石を据えていたものは，ＳＢ27・ＳＢ39である。また，鉄器農工具を出土した住居跡はＳＢ03・ＳＢ10である。砥石は鉄製工具を砥ぐことを用途とし，工作台はその修理等に使用したと考えることができよう。以上のようなことを考えれば，砥石・工作台をもつ住居跡は鉄器を所有していたであろう。とすれば，鉄器・砥石・工作台を有した住居跡は，弥生時代住居跡で比較すれば，15％強ということになる。これは，今後，資料の増加を持ち，考えなければならないことであろう。特に，弥生時代の中で渡来文化の影響をうけた当地方では。

赤焼き土器について

所謂，赤焼き土器とされている赤茶色等を呈し，土器製作の調整等は須恵器であるものが，当遺跡群でも数点出土している。杯・甕であり，時期はⅢA期～ⅢB期である。この赤焼き土器については，他に遺跡出土品を実見し，考えてみたい。

最後に，上鑪子遺跡群第3次調査に従事されました方々には，西からの・北からの寒風のもとにもかかわらず，ご協力いただいたことに感謝いたします。また，株式会社九州住宅流通サービスのご協力に深甚の謝意を表わします。

註1　第1・2次調査では，図面によると他に数条の溝を検出・調査されているが，除外した。

2　柳田康雄編『井原・三雲遺跡発掘調査概報・昭和49年度』　福岡県教育委員会　1975

同　編『　同　上　・昭和50年度』　福岡県教育委員会　1976

同　編『三雲遺跡Ⅰ』　福岡県教育委員会　1980

3　島取県青木遺跡の報文中などに報告されている

4　石野博信「掘立柱建物跡の調査」『古代学研究・92号』　古代学研究会　1980